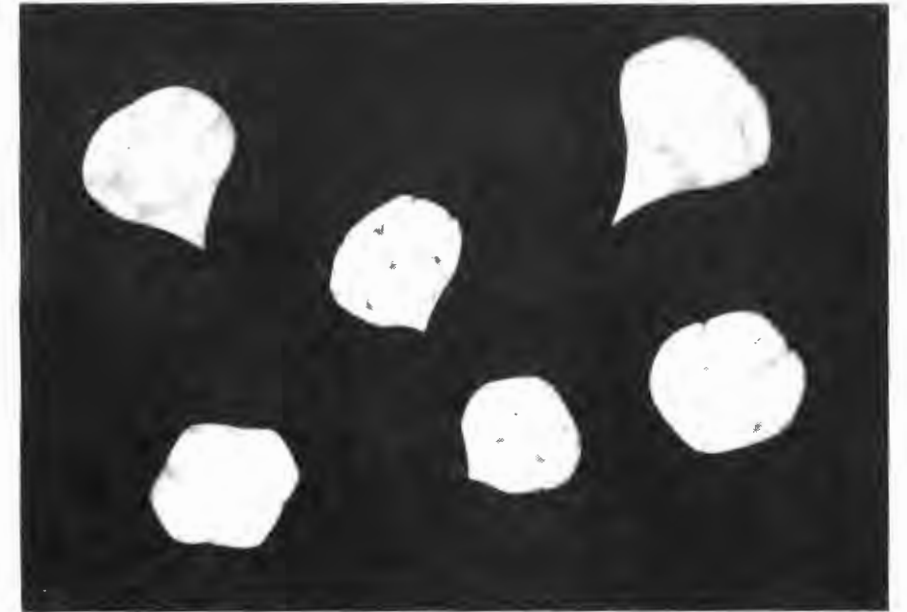




神戸大学
教養部

広報

NO.61

昭和57年10月25日
教養部広報委員会

目 次

——巻 頭 言——

新しい道を歩もう …………… 斎 藤 祐四郎 … 1

——特 別 寄 稿——

人 権 の 視 点 …………… 小 西 美 典 … 2

——弔 辞——

古 塚 隆 朗 氏 に …………… 4

木 村 守 雄 氏 に …………… 5

岩井たいさんを偲ぶ …………… 池 内 三 郎 … 6

——研究ノート——

アンドレア・ドリア号の衝突——動物の「心」を探る … 尼 川 大 作 … 7

——新教官紹介——

シラケた世紀末 …………… 内 田 正 博 … 9

自 己 紹 介 …………… 田 窪 行 則 … 10

今、思うこと …………… 水 口 志乃扶 … 11

——新事務職員紹介——

わが故郷より …………… 前 田 直 弘 … 13

自 己 紹 介 …………… 幸田 洋子、岸本 光義、坂本 宏信、松本 敏幸
高松 肇、山内 利夫、仲 俊之、仲田摩耶子
堂本 智子、榊井 信子、岡崎美智子、川島 慎二 …… 14

——随 想——

当世中国見聞録 …………… 堀 信 夫 … 17

王君の語ったこと …………… 居 安 正 … 18

体重29.8kg、栄養要注意要養護 …………… 渡 会 節 夫 … 19

——特別エッセイ——

数学教師50年生の今は …………… 早 原 四 郎 … 20

こ の ご ろ …………… 飯 盛 亨 … 22

——留学生便り——

中国政府派遣留学生紹介 …… [REDACTED]、[REDACTED] [REDACTED] [REDACTED] … 23

新しい道を歩もう

齋 藤 祐四郎



共通一次入試が始まってから今年で四回目になりこの制度が実施されてからの初めての卒業生が来春社会に送り出されることになる。入試の制度が変わっても大学の教育体制が変わったわけではなく、神戸大学の場合学生の質がそれほど変わったとも思われない。もちろん来年の卒業生から影響が現れることはないが、制度が次第に固ってくるにつれて、何か顕在化するところがあるかも知れない。

最近ある大学で、共通一次を受けて入学した学生について、一年後に再び共通一次の試験問題（入学時とは異なる問題）を解答してもらい、高校における学習達成度、およびそれらが一年後どの程度保持されているか、大学の授業科目の成績との関係などについて調査した報告書が、入試センターの研究部門から発表された。解析は進行中らしいが、発表されたところによると、国語や数学に比べて英語の学習保持度が悪いという。要するに一年たつと忘れ方が国語や数学に比べて目立つということらしい。英語はそれだけ暗記に頼る部分が多いということだろうか。ある有名進学校の出身で、学期末試験での物理の成績がもう一つふるわない学生がいた。きいてみると共通一次などを暗記でやりぬいてきたという。記憶力抜群の学生であろうが、所属する学部から考えて入試の時は相当の成績をとってきたと思われる。暗記である程度こなせる科目もあるかも知れないが物理もそれでやっていけるとはいささか驚いた。

試験にいい思い出などあるはずはないが、試験勉強のおかげでいままで判らなかったことがずっと理解できることがままた試験のおかげでという思いはある。

高校までは知識は吸収するだけだったかも知れないが、大学では吸収しながら、その知識を発展させたり実地に利用するよう努力してほしい。技術革新には2種類あるとあるイギリス人という。その言うところによれば第1種の技術革新は基本的・発明発見的なもので、イギリスが得手とするところ、第2種の技術革新はその技術的發展とも言えるもので、第1種を理学的研究とすれば第2種は工学的發展とも考えられる。日本は第2種の方が得意で、イギリスの現在の沈滞は第2種の技術革新的創造性に欠けているところに一つの原因があるらしい。カメラの發展の歴史から見ればイギリスやドイツが第1種で現在の日本は第2種の技術革新を生きぬいてきた国といえよう。しかしそれは民族特有の資質によるものではなく、イギリスでも過去にヨーロッパ大陸から技術を輸入し

て第2種の技術革新をとげた例が非常に多いという。漢字の発明は古代の中国だが、かな文字の発明は限らない恩恵を与えてくれた第2種の技術革新として特筆すべきものであろう。エザキダイオードも原理は日本で発見されたものだが、計算機の高速度素子を血眼で探していたアメリカがうまくそれをとらえたわけで、社会的経済的環境もその發展に無視できない要因である。

第1種と第2種でどちらが重要であるかはその観点によって評価が異なるであろう。人類の尊い財産としては第1種の方だが、狭い、国としての経済的繁栄から見れば、第2種の革新による恩恵は大きいし、第1種の発明発見をしながら甘い果実はよそ様に取られてしまうのは何とも口惜しいことであろう。

さてどのようにすれば第1種であれ第2種であれ創造性が育かれ育ってゆくか。もちろん教育環境社会環境が大きく影響し、さまざまな競走原理が作用してゆくことではあろう。

第1にまず疑問をつくること。何故鉛筆は削れるのか、雷が自動車に落ちたとき、中にいる人は助かるかなど。共通一次の入試の試験勉強で手に入れた知識で相当の部分は解決される。しかしとことん解決されることはないだろう。これを胸の中に大事に暖めておくこと。これは何かの折にふとヒントが浮かんで理解できる。このような疑問を沢山作ることが大切だ。

第2に毎日何か新しいことを試みること。何か変ったテーマの本というか新しい興味のわく本を探し出すのもよい。日頃あまり話をしない友人と声をかけ合うのも面白い。何もなければ毎日大学へ通ういつもの道を一寸変えてみるのはどうだろう。道は遠い。目的地は霞んではっきり見えない。しかしこつこつ歩めば目的地は必ず近くなる。

(物理学)

— 特集・私のこの一曲 —

ヴィヴァルディの「アー・モル」	池田裕司	25
シューベルトの「未完成」——私のクラシック入門	国友雅之	26
ドヴォルザークのチェロ協奏曲	小野理子	27
バッハと私の記憶——カンタータ147番中のコラール		
「主よ、人の望みのよろこびよ」——	本田烈	28
モーツァルトのピアノ・ソナタ集	桜沢正勝	29
中島みゆき「世情」(1978)	鍵本芳雄	30
ピート・シーガーと「腰まで泥まみれ」	中川保雄	32
聞かれざる名曲?	風呂本武敏	33
ブラームスの『第一番』あるいは「昭和ブルース」	井上健	34
バッハの「オペラ音楽」のこと	広森勝久	35

— ニュース —

大阪の古本屋	西光義弘	38
やったぜ 根性の初優勝!!	教養部職員野球部	39

— 随 筆 —

教養部の虫たち	木庭宏	40
さんまは目黒、うどんは讃岐	鎌田道生	41
One Learns More By Listening	Duane Engholm	43

— 在学生便り —

学生による広報活動——放送委員会		44
------------------	--	----

— 教養部のうごき —

人事異動		45
進学者数等一覧表		46
学生自治会との交渉経過		47
第二課程学生自治会との交渉経過		47
部落解放研究会との話し合い記録		49
教官写真		52
編集後記		54

表紙カット：「4次元のあさがお」

3次元のあさがおを真上から見ると、円上に広がる正5角形となる。

4次元のあさがおを真上から見ると、球上に広がる正12面体となる。

本文カット：本学学生 [] コンピューター・グラフィクス) 他。

人権の視点

小西美典

人権という言葉はさまざまな意味で用いられ、理解されている。新聞の読者投稿欄にこんな話が載っていた（毎日、8・29「みんな集合」）。女子中学生が芭蕉の句碑を見て、これは人権の侵害ではないかと大騒ぎ。その句碑の「物云婆唇寒し秋の風」を「物いうババア唇寒し……」と読んでのことだったという話である。「婆」をババアと読ませる意識こそが問題だと思うのだが、これなどは人権が笑い話の具（つま）にされている例である。それほど人権という言葉は日常的に口にされるが、そうなればなるほど人権の重みが減ってくるのは、インフレにおけるお金の価値と同じである。

しかし、ひとたび裁判所が人権について或る判断を下すと、われわれの生活が深刻な影響を蒙ることになる。人間（として）の権利という意味での人権が多義的なのは、人間いかにあるべきかということが人によって異なるのと並んで権利という概念のとらえかたが異なるからである。

日本人には伝統的に権利という意識がなく、したがって、それを表わす「権利」ということばもなかった（川島武宜「日本人の法意識」、柳父章「翻訳語成立事情」参照）。明治政府が政治上の手段とし

て法典の編纂を急ぎ、法律学が西欧から輸入されて以来「法律学者が頭を振ればケンリケンリと音がする」といわれるほどに、権利が法律学の中心概念になったのである。だから、制度やことばの方が国民の意識より先走っていたといえるが、こんにちでは国民の人権意識の方が、人権保障の制度や法律家の意識よりも進んでいると思える側面がある。

法律上、権利というときには、制度的に承認された（具体的な利益に、なんとか権という名のつけられた）権利を指すのがふつうである。人権という、抽象性のつよい名の権利についても、法律家はどうしても制度的な保障がどうなっているかということにとらわれるが、そうでない人は、ある状況のもとで正当性を承認されるべきであると思う要求を「人間の権利」の名で主張する。西欧の権利が語源的にも正当性を含意していることから、ことからの正当性を「権利」の名で主張すること自体、正当な意識の表われである（right, Recht, droit は、権利・正しいこと、さらに後の2語は法をも意味する。）

しかし、正当性を制度の枠内で認めるか否かの権限は裁判所に与えられている。裁判は法律にもとづいておこなわれねばならないとされているから、裁

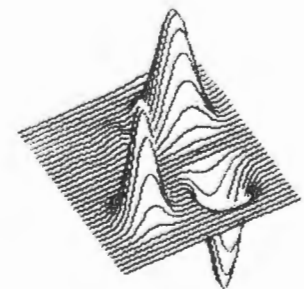
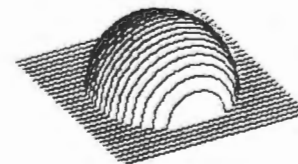
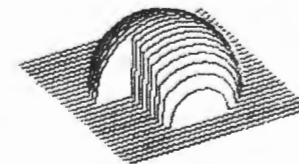
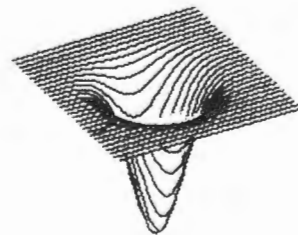
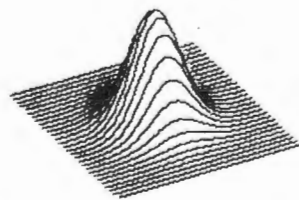
判官は、現実に制度化されたものとしての「人権」を考える。つまり、現実の法律秩序にとり入れられて、その構成分子となっているものとして権利を考える。しかし権利は、法律秩序そのものに対して提起される要請（制度化されるべきことを要求する正当な要請）でもありうるから、国民の意識との間にズレを生ずることがある。このようなばあいには、法律の機能は不完全になる（人々の生活が乱されることになる）。そして、これを調整する方法は、結局、権利に対する意識のあり方によって異なるのである。

人権について二つの考え方があるばあいに、どちらを優先して保障するかという選択の指導原理は、先験的妥当性をもつものでなければならない。ことに、人間らしい生存を営みうるための要請（たんに、生存に必要な物の要請ではない）としての生存権は超法律的な意義をもつものとして概念せられねばならない。なぜなら、民主主義は人間の生存そのものが価値あるものとして社会生活上尊重されるべきことを前提としているが、個人の生存は有限であり、社会生活そのものは原理的に無限であるから、人権は社会生活の存立を可能ならしめるという条件のもとで個人の生存を価値づけるべきであるからである。このような意味から、たとえば堀木訴訟の判決は、一応の論理（スジ）は通っているが不当な判決であったといえる。法解釈の前提そのものを問いなおすことが必要であり、さらには福祉の制度そのものを人権保障の原点から再考すべきである。さらに、

法の解釈が首尾一貫したものでなければならないことはいうまでもないが、法的論理の前提そのものを熟慮すべきである。長沼ナイキ基地の判決で採用された「統治行為論」に例をとってみよう。「統治行為論」は、司法権は行政権に固有の領域に踏み込むべきでないという三権分立の原則に由来する。この原則からすれば「統治行為論」を採用して判断を避けることは論理（スジ）の通った考えであるといえる。しかし、三権分立の原則はそもそも、人権を守るために国家権力の集中を排除するという目的から生れたいわば手段である。だから、統治行為論は手段の目的化であるといいうる。法の解釈において、明文の規定を否定するような解釈が多数の学者によって支持されている例もあるのである（民法132条、利息制限法1条2項）。

ともあれ、民主主義の基本が全体主義とは正反對に、国家の存立や政府の存在は国民の生存という目的のための手段であるという“原点”を見失ってはならない。併せて、お互い同士が他人の人権を尊重するという基本的義務を負っているということが、逆説的ではあるが、人権を確保するための“原点”でもある。これは、スコウビー（グレーム・グリーン「事件の核心」の主人公）のように「自己の生存そのものが他人を害することになる」というような、平均的人間を超越した人生観を要求するものではない。

（法 学）



弔辞——古塚隆朗氏に



私たちはここに同僚古塚さんの御逝去に心より哀悼の意を表するものであります。古塚さんは昭和四十四年、大学紛争のさ中に私たち神戸大学ドイツ語教室の一員になられました。以後十三年間、周知のように大学は必ずしも平穏とは言えなかったのですが、古塚さんは終始、あせらず、急がず、もっぱら自らのペースを乱すことなく歩みつづけて来られました。私たちが、ある時は急ぎ、ある時はあせったりすることはあっても、古塚さんだけは、自分はこのようにしか歩むことはできないのだ、とでも言いたげな申し訳なさそうな顔つきで、終始一貫、自らの歩みを、あるいは自らの生き方を変えることはなかった、と思います。古塚さんの歩まれた道は、外的な名譽だとか、世間への思惑だとか、そういうものとは一切関係のない、自分自身に正直な道であったと思います。

古塚さんは、カロッサを研究し、その魂の由来をたずねてノヴァーリスにいたり、さらにはヨーロッパのオペラに傾倒してこられました。古塚さんの心の奥深くには、ロマン的な、艶やかな魂が息づいていたのだと思います。しかし古塚さんは、その魂を直接に表面に表わすことは避けておられました。しかしそれがふと表面に表われるときがありました。そんなとき、古塚さんの顔に必ず一種の羞らいが、羞かしそうな表情が浮びました。

古塚さんは話し好きな人でした。何とも言えない穏やかな笑みを浮かべながら、極めて辛辣な言葉を次から次へと語ることができました。そういう時の古塚さんの楽しそうな姿がいま、目に浮びます。

古塚さんはお酒の好きな人でした。私たちが打ちそろって湯村温泉へ行った時のことが思い出されます。古塚さんはふだんは何かと身体の不調を訴えられることが多く、不調がない時には無理につくり出してでもと思えるほどでしたが、この時ばかりは、大変御元氣な御様子で例の穏やかなお顔で、お酒を飲みながら馬鹿話に打ち興じておられました。思えばあれからまだ十日もたっていないのです。帰る時、古塚さんはプラットフォームの売店で買ったお酒の瓶を捧げ持つようにして列車に乗って来られました。その時の、いまだ子供のような、大きな、丸い眼。私たちはこの時の古塚さんの眼を一生忘れることはないでしょう。そこには古塚さんの、何の翳りもない本当の姿が輝き出ているのでした。

もはや古塚さんのお姿を見ることのできなくなったいま、私たちの心の中で、この古塚さんの眼はいっそう輝き出すのです。そしてそのようにして今後、古塚さんは、私たちの心の中で生きつづけてゆくことになります。

古塚さん。いまはもはや何の気兼ねもなく安らかにお休み下さいますように。古塚さんの御冥福を心よりお祈りいたします。

昭和五十七年四月八日

神戸大学教養部ドイツ語教室代表
小松原千里

弔辞——木村守雄氏に



木村君、君は病をえた後も、神戸大学の同僚の負担が増加することを嫌い、体調が許す時には講義を受け持たれましたが、私たちは内心大いに心配しておりました。私は五月十八日に英語科の使いとして君を見舞った際に、この機をとらえて、個人的立場で、今後徹底して長期療養に専念するようにと、初めて強く説得しました。しかし、それが、私たちが、そうして私が、君に会った最後となりました。結果的にはともかく、私の心の中ではなぜ一年前に説得しなかったかと残念でなりません。

神戸大学における君との思い出のいくつかが今私の脳裏をかすめますが、これもまた遅すぎたことの一つとして謝らねばなりません。八年前の六月のこと、私はある短い評論の翻訳に当って、そこで言及されているT・S・エリオットの詩行の意味に自信が持てず、君の蔵書を拝借し、また君の解釈をうかがったことがありました。世話になった礼として上梓されたその翻訳を笑覧に供すべく差し上げるべきところを全く失念していたところ、君が病に倒れた時に思い出しましたが、病床にお届けするのがはばかられたまま今日を迎えたので、ここに持参致しました。

かくして、君との関係では私は遅すぎたようです。しかし、君はまた余りに早すぎました。君が病床に伏して以来同僚であるわれわれはみな病の重大さを知りつつも、かくも早く幽明界を異にする日を迎えようとは夢想だにしませんでした。呆然と立ちつくす私たちをあとに、君は帰らぬ旅を始められた今、私どもは空しさに襲われながら、君の旅路の安からんことを願うばかりです。では、木村君、さようなら。

昭和五十七年六月九日

神戸大学教養部英語教室代表
千葉兼太郎

岩井たいさんを偲ぶ

池内 三郎

教養部学生掛主任岩井たいさんは、去る7月20日午後8時5分、■■■■のため急逝されました。享年53才でした。

岩井さんは、昭和25年11月、神戸大学事務局学生部補導課にご奉職になり、以来、経営学部を経て昭和50年5月教養部に来られ、亡くなるまで既に31年余お勤めになりました。

この間、庶務・会計・学生関係と、あらゆる分野の掛を経験され、明るく温厚な性格をもってよく後輩達の指導をされました。

又、そのお仕事振りは誰に対しても親切で誠実に遂行され、昨年は、学生主任に昇格されました。

これからは、更に教養部のためにご尽力いただかなければならない矢先の不幸は、本当に残念で惜しみても余りあるところです。

生前は、お仕事は勿論のこと、生花・スポーツ等の面においても非常にご堪能で、スキー・テニス・バトミントンと常に若い人達の先頭に立ってご活躍されていただけに、誰もが急逝を信じる事ができないようでした。

岩井さんのありし日の元気な姿を偲びつつ、心からご冥福をお祈りいたします。

(庶務掛長)



アンドレア・ドリリア号の衝突

——動物の「心」を探る——

尼川 大作

1) 動物に心があるか

1956年夏の濃霧の夜、ニューヨーク沖でアンドレア・ドリリア号とストックホルム号が衝突した。……双方ともレーダーは正常に働いていたのに。この歴史に残る海難事件はそれなりに究明されるべき点があるがここでは立入らない。しかし、この事件にちなんで、動物生理・行動学者のグリフィンが、コウモリの中のある種のドジ(?)なものを「アンドレア・ドリリア・コウモリ」と呼んだのは興味深く思える。良く知られているように、コウモリはソナー方式で飛行する。いわゆる「こだま定位」あるいは「反響定位」を行う数少ない動物の仲間である。そのソナーは優れたもので、「耳で物体を視ている」とさえ言われるほどシャープな図形解析をし、ドップラー効果などによる相対速度の測定をしているらしい。ところが、この優れたソナーを使って飛行しているコウモリどうしが、何と正面衝突をするところをグリフィンは、たまにはあるが、目撃した。彼によると、コウモリが空間的記憶に極度に頼るあまり現実の情報処理をおろそかにするというのである。コウモリが熟知した環境を飛ぶとき、定位音を放射しつつけているのに、そこに新たに物体を置くと衝突したり、逆に前からある物体を突然取り去ると、それが前にあった場所にさしかかったとき後ずさりする場合があることもグリフィンは実験してみせた。

これらの事実や、チンパンジーのサイン言語の実験、ミツバチのダンスによるコミュニケーション(この場合、ミツバチは太陽方向を重力方向に読みかえる)等をもとに、グリフィンは「動物にも心があるのではないか」と問う、心といわないまでも心の原形というべきもの、あるいは内的心像が、その点にテーマをしばって書かれた本が最近出版され、邦訳されている(「動物に心があるか——心的体験の進化的連続性」桑原 訳 岩波現代科学選書)。

2) 学習するハエ

私はこれまで分子生理学のフィールドを渡ってきたものであり、昆虫やカエルの感覚器、発電魚の電気器官の興奮を分子・細胞レベル(いわば低いレベル)でみてきた。その私にも動物の行動と

いう高いレベルをさわってみる機会が最近与えられた。……研究室に飛びこんできた一理学部生のおかげで。彼女はここで動物行動を扱った卒研をしたいという。その度胸と熱心さにおされて彼女に与えたテーマが「ハエの学習」である。

多くの昆虫が学習能力をもつことは前から知られており、最近ではゴキブリに迷路(T字路)問題を課したり、バツに道具で学習をさせたりして、いろんな学習実験がなされるようになった。その中でハエはそれほどくはくはないと思われていたが、10年ほど前にネルソン女史が初めて古典的条件づけ(パブロフ型条件反射)に成功した。それまでは、「ハエは頭が小さいから神経細胞を節約するために学習部門を切りすてたのでは?」と、どこかの国の「行革」についてのコメントみたいなことをもらす大家さえた。続いてヒットをとばしたのが宮城教育大の福士さんで、彼は嗅いでイエバエを効果的に学習させる方法を開発した。

今回、その卒研(Aさんとしておこう)と私がやったのは、ハエの学習(古典的条件づけ)の味覚による実験系を改良して効率の良いものにし、その上で、麻酔や抗生物質注入の効果を調べるということであつた。使用したハエは、ずーっと前にアメリカから輸入したもので、クロキンバエといい、生理学実験では世界中で使われているものである(日本では東北地方以北に棲んでいる)。このハエは糖溶液にふれると口吻を伸展させて呑み取ろうとする行動をおこす(吻伸展反射)。一方、濃い食塩水を与えてやると口吻をひっこめる(つまり、忌避する)。ところが、二日間絶食させたハエの足の味覚器(足にもある!)に食塩水を4秒間接触させ、その最後に砂糖水を2秒間だけ口吻に与え、この操作を15秒おきに6回くりかえすと、大半のハエが条件づけされる(学習の成立)。たとえば2時間後にハエの足に今度は食塩水だけ与える(条件刺激)と、本来はひっこめてしまうはずの口吻を堂々と伸展させ、まるで砂糖水を催促するかのようにそれをふりまわすようになる。この記憶はすくなくとも5時間は持続する(保持される)ことが判った。Aさんは、さらにチッソガスを25秒間流す処理(ハエは麻酔される)を訓練後

シラケた世紀末

内田 正博



る。結局のところ我々は、保守にも革新にもシラけてしまっているのではあるまいか。流行歌の文句に、「わたしみんな気づいてしまった／しあわせ芝居の舞台裏」（桜田淳子『しあわせ芝居』）とあるが、世紀末とはある意味では、「しあわせ芝居の舞台裏」を見てしまった時代といえるだろう。これまで善と思われ真と看做されていたものが、実はそうでもなさそうだとすることが、子供の眼にも明らかとなってしまふ。かくしてシラケは日常的気分となり、醜悪な現実を避けて、人々は自分の身近なものにしか関わろうとはしなくなり、あるいはひたすら自分本位の夢だけを追い求めるようになって、次第にナルシズムの甘美な味わいと呪縛から離れられぬようになる。異質な他者との関わりは希薄となり、連帯は敬遠され、孤独が愛好される。そして、そこかしこに孤立した個人や孤立したグループが夫々それなりの主張（ポーズ？）をかかげる。たとえば、皆で声を合わせる歌声喫茶なるものはとっくの昔に消滅し、一人いい気分に浸れるカラオケスナックが今は大繁盛である。あるいは、スポーツは言うに及ばず、中にはホストクラブまであるという、ありとあらゆる趣味を反映して、雨後の竹の子のように生まれキャンパスに咲く同好会の存在。

アンガージュマンでなく傍観者の態度が支配的な時代には、青年たちもまた、行動や信念よりも認識や夢想に傾く。ひとすじの思いに貫ぬかれた行動や一途な信念は何やら胡散臭いものに思われ、一つの事柄はあらゆる角度から検証されることが必要となり、その認識は一層深化し、あるいは一層拡散してゆく。こうして認識と理解は行き届くかもしれないが、現実の体験から、身をもって生きることから、心の底ではそれを渴望しつつも、

「世紀末」という言葉をしばしば耳にするようになった。たしかに20世紀も末近くなり、この言葉を使ったとしても何ら不思議はないかもしれないが、本来ならば19世紀末とその退廃的な時代状況とを指す言葉がよく用いられるようになったのには、それなりの理由があるはずである。それはおそらく、とくに1890年代のフランスを中心としてヨーロッパ中に瀰漫していった或る特別な精神状況と相通ずるものが、われわれの時代にもそろそろ見え始めてきたということなのであろう。それは、懐疑主義的で、耽美的であると同時に物質的であって、おおむね現実逃避に流れ、どこか暗い崩壊の予感と不安を孕みつつ、ナルシズムの匂いの漂う密室的な雰囲気をもつ精神状況であったといえるだろう。そして今の言葉に言い直してみると、たとえば懐疑主義的とは、ややレベルは落ちるが、シラケにあたるだろうし、また耽美的とは、ややあっけらかんとしているが、フィーリングとか感覚的とかあるいは何々の美学という言葉がやたらと使われている状況と重ね合わせることができるかも知れない。いずれにせよ、野暮ったい真とか善という価値観よりカッコいい美的価値感が優先されるのである。じじつ、かつては真であり善であることが当然とされていた価値観や主義主張に対しても、いまではもはや全面的に信頼することは不可能になってしまった。中味がアヤフヤなら表被や衣裳で勝負することになるだろう。素朴な信念に溢れた時代は、尤もそれは貧しいせいでもあったが、服装もまた質素であり、むしろなりふりを構わぬという風であった。たとえば十年位前までの若者とカッコいい今の若者の服装を比べてみても、そんな感じがしないでもない。しかしそれもやむを得ない面もあるだろう。いまは自分の周りのどこを見回してみても信頼するに値する確固たる拠所を見出せない時代なのだ（しかし実をいえば、いつの時代でも突きつめればそんなものは元々無かったのではあるまいか。）とにかく眼に見えない価値がいい加減なら、おのずと眼に見える価値に頼らざるを得ない。かくて人々は肌ざわりのよい現実の側に身を置こうとする。若者の保守化と言われる風潮もまたそんなところから生まれるのであろう。保守的であること自体が問題なのではない。ただ「なんとなく」無関心のうちにそうになっていることが問題なのであ

のさまざまな時点で行ってみた。その実験装置はアイデアものだがここでは省かせていただく。すると、訓練直後のガス処理ではほとんどのハエが記憶を失っているが、処理の時点がおくれてくるほどガスの効果は減退し、30分をこえれば記憶は正常に保持されていることが明らかになった。

Aさんと私は次に、ハエの体にガラス毛细管で抗生物質を注入することに挑戦し、タンパク合成を抑制する物質、シクロヘキシイミド（CX）、を1マイクロリットルだけ注射してその効果をみることに成功した。対照群にはうすい食塩水を代りに注射した。その結果、訓練直後にCXを注射されたハエは2時間後のテストでかなりのものが記憶を失っていたが、訓練後1時間たってCXを注射されたハエ（ただし訓練直後にはうすい食塩水を注射してある）は対照群と同じく高い率で記憶を保持していた。たかだか40ミリグラムの体重のハエに、微量とはいえ、注射をしてCXの差が出るとは期待しがたかっただけに、Aさんもこの結果が出て喜んでいただようだ。

3) 記憶の安定相と不安定相

記憶には二つの段階があることは、だいぶ前にアメリカでラットを用いた実験で明らかにされている。つまり、条件づけによって記憶が形成される初期の段階は不安定な相であって、麻酔や低温その他の強い刺激によって忘却がおこりやすい。ところが、さらに時間がたつと、記憶は固定されていき、二段階目、つまり安定相になるといわれる。この後の方にタンパク分子が関与しているのも確実視されてきている。以前には、記憶の内容がタンパク分子の配列自体にコード化（符号化）されていると考えた人々が大勢いた。学習された事柄があるタンパク分子の形をとってしまう（タンパク合成）と、その後にくらタンパク合成を阻害しても、一旦形成された記憶はそのタンパク分子が破壊されなかりは安定して存在することになると考えられた。しかし、この仮説は最近ではどうもありそうにないとされてきている。「ドイツ語尾変化表記憶タンパク」とか「〇〇公式集記憶タンパク」などをO文社あたりからキット



で買ってきて、試験を切りぬけようとするムシのいい受験生の夢は、残念ながら実現しそうにない。だが、記憶自体が多数のシナプス（神経細胞と他の神経細胞との接合部）の作用の中に保持されているらしいことは最近有力視されており、事実、学習を課した脳のシナプスがふくらんだり発芽したりするという形態変化が電子顕微鏡的に調べられている。シナプスの形態変化はそのまま電気伝導度（コンダクタンス）の変化につながり、神経細胞を通る電気信号（インパルス）の通りやすさにつながるし、もちろんタンパク合成も変化する。

無せきつい動物では、ハチとショウジョウバエで記憶の二相に相当するものが報告されているが、他にほとんど例がない。今回の私達の実験は、この記憶の二相をハエについてかなり定量的に示したものであり、タンパク合成の阻害が記憶の安定相では効かないことを昆虫を用いて示したのは多分始めてではないかと思っている。

もとより、ヒト（及びその他の霊長類）の記憶・学習と昆虫のそれとの間に同一レベルで論じえないものがあるのは当然である。しかし、進化的にみえてくと、後者は前者の原始的形態につながるとも考えられる。学習や記憶の一般的概念を昆虫で調べることでその共通項の解明をより容易にすることもありうるのではないか。

4) 分子レベルから行動のレベルへ

最後に、私がこれまでやってきた感覚細胞や神経細胞の受容メカニズム（低いレベル）についての研究が上記の学習・記憶といった高いレベルにリンクすることを述べておきたい。先にも記したように、学習・記憶といったものがシナプスの存在状態に依存することが近年クローズアップされてきている。このシナプスで情報が伝達されるわけであるが、多くの場合、低分子のある化学物質（例えばアセチルコリンとかアドレナリン、トランスミッターともいう）が仲介役をしており、このトランスミッターが情報の受け手の神経細胞にキャッチ（受容）され、電気信号に変換されていく。生物教室の同僚である林さんと私でここ二、三年にわたって共同研究をしている中心テーマも、シビレイの電気器官のシナプスにおけるアセチルコリン受容→電気信号変換のメカニズムを扱ったもので、分子生理学としては面白いものである。シナプスはトランスミッター以外に様々のコントロールを受けており情報の処理という点からみても関心をもたれるところだと思いが、もう紙面も尽きてくるころなのでこの辺でオシマイ。

動物の心を捕えようとするグリフィンのテーマは遠大であり孤高のように思える。しかし、そこに至るさまざまなルートが模索されていることをこの一文で紹介したかった。（生物学）

人々はますます遠ざかっていく。かくて人々は、人工的に整えられた栄養過剰の社会の中で身の安全に満足を覚えながらも同時に、なぜか身動きできぬ袋小路のもどかしさと苛立ちを感じているのである。

変身願望というものが発生する地盤もおそらくこのようなところにあるのであろう。たとえば、或る人は善悪の彼岸を超えてジキルとハイドを同時に演じることをひそかに望み、あるいはたとえば、ある日突然、女は翔ぶことを欲し、男は蒸発

を欲し、子供はツッパリかもしくはブリッ子への変身を欲するのである。いずれにせよ、誰もが割り当てられた一つの役割に甘んじることを拒もうとする。シラケの底にはこうして変身願望がとぐろを巻いていることもあるのだ。ひよっとしたらハトが一夜明けるとタカになっていたということさえありうる。畢竟われわれに必要なのは、さしあたりシラケにたえる忍耐なのかもしれない。

(独 語)

自己紹介

田 窪 行 則

私は、京都大学文学部言語学科で博士課程を了えると同時に韓国の慶州にある東国大学の分校に日本語教師として招聘され、そこで2年足らずを過しました。

外国暮らしは最初でもあり、日韓の文化習俗は非常に似ているのに細部で意外な違いがあるので大変とまどいました。特に困ったのはやはりことばです。朝鮮語は、休止期間はあったにせよ、10年余り学び、古典語も読めるので、いざとなればしゃべるのはわけないと思っていたのですが。

まず釜山の金海空港に着いて空港バスに乗ったのはいいのですが、いくらたっても高速バス乗り場に着かないのです。空港から慶州までの直行バスはないのでまず高速バス乗り場に行きそこから慶州行きバスに乗り換えるのです。そこで一番前にいた私は運転手に、「ターミナルはまだか」と聞こうと思うのですが、なんと、この「まだか」という朝鮮語が思い浮ばない。「まだ」は「アジク」「ですか」は「イムニカ」なのでこれらを合わせればいいのですが、「アジギムニカ」なんてのは見たことも聞いたこともない。これはあせります。そこで「まだですか」にあたる表現をひねり出そうとするのですが、出るのは油汗だけです。

韓国ではバス停に標識などないし、空港バスは車掌もいない。もう行きすぎてしまったかも知れないと思うと益々あせってきます。それでも必死の思いで、「高速ターミナルに着くにはあと何分ばかりかかるや」てな文章をこしらえて、口の中であらうかしてみたのですが、これが難かしい発音

の連続で、とても最後までいえそうにありません。口をパクパクやっていると突然ボタンと音がして、反対側にすわっていたオッサンが通路に立って演説を始めます。朴大統領、アメリカ、日本語……というような単語が聞こえてきたので、すわ一大事、日帝排斥演説でも始まったのかと身を小さくしていると、彼は何を思ったか私にドサッと本を渡すのです。心臓がとまるかと思いつつよく見るとこれが英日の会話書。つまり、彼は本の行商をしていたわけです。

韓国では本の流通が遅れているので小規模の出版社では社員が直接行商をします。そう思って聞くと彼の弁舌はなかなかうまいものです。韓国の人はもともと演説はうまいのですが、プロともなればほればれするような口まわしです。で、少し落ち着いたかったので彼がすわるのをまって準備した文をいおうとするのですが、気があせって口のほうがともないません。プロポーズする時はかくやと思われたほどです。



ところが、案ずるよりは生むが易しかと申しませんが、この運転手さん、同じような日本人を何度も乗せたことがあるらしく、高速ターミナルに着くと、ちゃんと教えてくれたばかりか、荷物までおろしてくれて、おまけに小銭がなかったので運賃までまけてくれました。

高速バスは目的地まで直行なので問題なく、慶州につくと学科主任の先生が出迎えに来てくれました。

あとで友人に聞くと「まだか」というのは直訳できず、「まだ遠かったか」にあたる表現を使うとのこと。この過去形は過去の意味はなくて、「ている」にあたる形が縮約されたもののようです。即ち「遠くあるか」。「似る」等の少数の語にのみ化石的に残っているものです。「もうですか」

今、思うこと

水 口 志乃扶

神戸の海は明るい。

日本海の荒海を見て育った目には、神戸の海は非常にまぶしく見える。こちらにやって来て、もう五ヶ月にもなるのに、そのまぶしさは変わらない。生まれ育った土地の影響とは恐ろしいもので、どこへ行っても、何を見ても、無意識に故郷と比べている自分を見出して、はっとすることがある。とにかく、故郷の富山の海と、神戸の海は全く違う。よく、「富山って、金沢のある所ですね」と言われるくらい、こちらにはなじみのない土地であるし、鉛色の空から雪の降るあんな所に、よく住めるものだ、と半ばあきられてもいるようだが、でも、北陸という土地は、冬に本当の姿を見せてくれるのだと、私は思っている。雪が降り、海は荒れ、自然の力を否応なしに認めざるを得ないし、それに逆らうこともできない冬である。でも、そこに住む人間は、厳しい自然の中で自分を通すすべも知っている。冬は、自然にも人間にも会える季節。だから、日本海を見るには冬がいい。時々思う。一番神戸らしい海は、いつの海なのだろうと。分かるまでには、まだまだ時間がかかりそうである。

故郷に対する思い入れは、故郷を離れてはじめて持つようになった。住んでいた時には、ほかの

はいいのですから「まだですか」がないのはおかしい話です。従ってこんな表現、思いつかないのが当然で、土台からして、最初乗る時に「どこそこで降ろしてくれ」といっとくなり、片言で「ターミナル」などとわめくなりすればあんなに悩まなくてすんだわけです。

私自身の名誉のために付け加えますと、例の光州事件で休校になり、余った時間を利用して、マンガの本を100冊、小説を40冊ほど読んだおかげで、授業が再開された9月には、講義はすべて朝鮮語でできるようになりました。

もっとも本格的な失敗談はそれから始まるのですが、その話は又別の機会に。

どうぞ宜しくお願い致します。

(日本語・日本事情)



土地に対する憧れの方が、断然強かったように思う。高校を終えると、東京の津田塾大学の英文科に入学。片田舎の高校では聞けないようなきれいな英語と、女子大らしくなぐさ囲気、大いに驚いたものだった。少し英語をかじると、今度は日本の外を見たくなり、ヨーロッパに一ヶ月旅をしたのではもちろん満足できず、学部三年を終わってから、津田の奨学金で、オーストラリアのキャンベラにあるオーストラリア国立大学に一年行かせてもらった。第二の故郷は、と聞かれたら、

わが故郷より

前 田 直 弘



真夏の都会の雑踏から離れ、瀬戸内の静かで美しい自然と素朴そのものの生活環境の中に身をおいて、締切期限の迫った教養部広報に載せる新任自己紹介のための文を書いています。歳月をかさねるに従って、ますます故郷の地に愛着と懐しさがつのる心境をどのように説明すればよいのかそのすべを知らないまま、今年一年振りに潮の薫と潮騒の音の聞えてくる故郷の我が家にて、休暇の一時を過しています。ここは四国の表玄関高松市から急行列車に乗って、西へ約30分程行くと予讃線と土讃線の分岐点のある多度津町に着きます。その港から1日2便しかない小型の連絡船に乗りこみ約1時間のところに我が生国である佐柳島があります。瀬戸内海国立公園のほぼ中央に位置しており、この地域を備讃瀬戸の名称と呼ばれ、この区域に点在する島々を塩飽諸島といいます。この島々の歴史をひもといてみると海賊（水軍）の昔がしのばれます。塩飽島民は「兵船操縦」の術に秀でていたので水軍として活躍し、鎌倉、室町時代に朝鮮・中国の沿岸で貿易を営み、ときには海賊のような行動をして「倭寇」として恐れられたと伝えられています。しかし、江戸中期以後になると、経済上の変化が起って塩飽船は減少し、暴風雨で船が沈み没落への道をたどることになったが、それでも長い間の伝統に支えられた操船の技術と海の男の心意気は失せず、幕末になって万延元年（1860）船長勝海舟にひきいられて太平洋を横断し、アメリカにわたった咸臨丸の乗組み水夫のほとんどが塩飽出身者で占められていたとのことであります。佐柳島にもその時に選抜された水夫の墓があります。島の人々はかつて東アジアの広大な海に乗り出し活躍した祖先の栄光を誇り高く思っています。私はこの島に15才の春まで山と海に遊んで育ちました。当時は電灯も水道もない半農半漁の貧しい島でしたが、美しい景色に囲まれた自然環境は、自然にすなおに生活する謙虚さを教えられ、今も心の糧として逆境にある時のささえとなっているように思えます。しかし、今は周囲5キロ程しかないこの小さな島には老人ばかり約300人が住んでおり、若者はみんな関西方面に職を求めて出てしまった。私もその中の一人です。その後、昭和25年に戦災の廃墟の後も今だ生々しく残る神戸に出て、職を求め、学を求めて放浪の幾歳月を送ってきました。当時をしのべ

ば現在の物質文化は夢の夢、隔世の感があります。私が神戸大学に奉職することになったのは、昭和42年6月にそれまでに勤めていた県立神戸医科大学が国立移管となった際に身分も一語に移すこととなりました。以来、附属病院業務課を振り出しに同管理課、理学部、本部庶務課部人事、同庶務課を経て、この度教養部にてお世話になることになりました。着任して早や4ヶ月が過ぎました。この間教養部を知るのに必要な諸行事も一つ一つと経験させて頂いております。また、事務を遂行するに大切な教官と事務官との信頼関係も先輩諸氏の努力のお陰で大変良好であることが判りました。教養部のよい伝統と環境に感謝し、これに安住することなく、教養部に内包する種々の問題点をしっかりと認識して、より一層よりよい環境づくりに日々努力精進してまいりたいと思います。教養部では現在一般教育の質的向上を目ざしての胎動が始まっています。国の行財政は近年にないはなはだ厳しい状況の中にあります。その早期実現をめざすには、教養部の教職員が一体となって、明るく、活力に満ちた職場環境づくりの醸成に努めて行かなければならないと考えてます。最後に趣味は雑魚釣り、昔は山登りをしていましたが今は健康管理を兼ねてゴルフを少々やっています。文章といえば公文書以外に書いたことがありませんので支離滅裂な文章になりましたがご容赦下さい。どうかみなさん方のご指導とご援助を心からお願い申し上げます。

（事務長補佐）

私は迷わずオーストラリアと答える。それくらいに印象は強烈だった。オーストラリアで行かなかった所は、北西部だけで、あとはほとんどの広大な砂漠を走り回った。オーストラリアに感謝したいのは、オーストラリアの人や自然に触れられたということに対してよりも、アジアや日本を眺める目を持つようになったことに対してである。日本の事をあまりにも知らない、という事実には愕然となり、もっと日本を知ろうと決心して、帰って来たものであった。

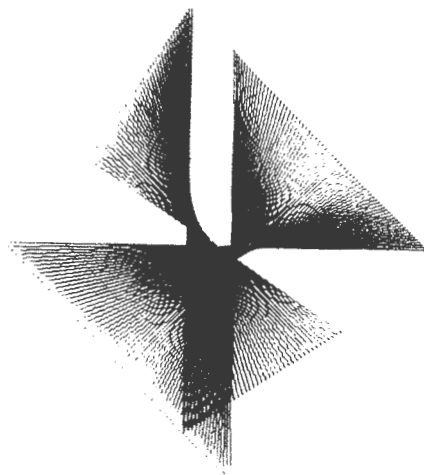
語学をやりたいと思い出したのは、学部の一学の終わりの頃である。英語学の安井稔先生のもとで勉強したいというそれだけの理由で、筑波の大学院に行った。筑波山のふもとのこの大学は、関東とは言っても、東京とは全く違う生活環境で、住むには少々難儀したし、また、筑波という大学に対する世間の風あたりも決して弱くはないが、私は、五年間の博士課程を、筑波で自由に過ごせたことを、ありがたく思っている。

それにしても、神戸に来るとは思ってもみなかった。住む場所を変えるのは慣れているし、やじ馬根性も旺盛であるから、どこで勤めることになってもかまわない、と思っはいたが、こちらに来る前は、やはり不安であった。立場が変わることと、関西という未知の土地に対する不安である。外国に行く時には、不安などみじんも感じなかったのに、同じ日本の、それもさして遠くない土地に行くのに、こんなに不安定な気分になるとは、

我ながらおかしかった。はじめての教壇はやはり恐怖であり、一ヶ月くらいは、「明日は授業」と思うだけで胃が痛くなったが、しばらくすると不思議な光景に気がついた。教室の後ろの壁にへばりつくようにして座っている、生きているのか死んでいるのか分からないような、無表情な学生たちがそれである。結構おもしろい人もいるようなのに、授業になると、生彩がない。立場が変われば見方が変わるわのは当然だが、それにしても自分が学部生であった頃とは、確実に違う。もちろん、学生像は時代とともに変わるものであるし、ある一定の姿を押しつける気など毛頭ないが、学生から、若さと、頭の柔らかさと唐突さは、あんまり感じないのである。駆け出しのひょう子か、こういう事を言うと、おかしく聞こえるかもしれない。しかし、これが教壇に立った、第一印象であった。

「教師は学生によって鍛えられる」と人から言われ、また自分でも、本当にそうだと思う。学生との接触が短いものであっても、何かをつかめれば幸いである。こちらに来る時に、ある先生から「教職を楽しみながら、自分の研究を続けなさい」と言われた。実感として感じるには、あまりに遠い言葉である。しかし、その先生の年に私が達した時、この言葉が言えるよう、この海の見える美しい街で、ゆっくりがんばろうと、今、思っている。

（英 語）



自 己 紹 介

幸 田 洋 子

4月1日付の異動で教養部に参りました。私の前歴の紹介となりますとかなりなが〜い年月を逆のぼる事になりますので、前略をさせて貰い、最近の一部分をお話ししますと、52年11月、楠地区にあります附属病院の医事課保険掛で1年間、レセプト（正式には医療報酬明細書）作成に専念しつぎの医事掛では、外来（麻酔科を経て皮膚科）窓口で、医師（ドクター）、看護婦（ナース）、患者（クランケ）さん達の間にはさまれての仕事でした。何分にも現業の仕事なので、学校事務とは全く違う世界でした。この4年余の体験では、いろいろな貴重な勉強をさせて頂きました。さて次に、この若さの固まり、エネルギーな教養部にお世話になり、5ヶ月がアッと云う間に過ぎてしまいましたが、仕事は勿論、スタートラインに戻り、初心の気持ちで専念したいと思います。又スポーツでは、施設の整った学部に来たのを機に、若い時から持ち合わせている精神？「参加する事に意義あり」が少しずつ頭をもたげて来ましたので、私の出来る種目より再挑戦（よわい（年齢）を忘れて）して行きたいと思います。皆様よろしくお願い致します。（第二課程掛）

岸 本 光 義

私は、本年4月1日付にて工学部から当部庶務掛に配置換になりましたが、本学採用後10数年大規模な部局ばかり体験してきたため、別段とまどいはありませんが、なぜか未だになじめないのが実情であり、1日も早く当部の一員となり得よう努力したいと思っております。

また、私は庶務系の実務しか経験がありませんが、当部に在職中は職員のため、教育研究活動を支える歯車として頑張る所存でありますのでよろしくお願い致します。

最後に、当掛は職員の皆様全員が幸福になるよう豊富な知識を駆使し、円滑な運営がなされるよう日常心掛け、出来る範囲において一生懸命努力する一掛ですので皆様の御協力をお願い致します。どうぞよろしく！（庶務掛）

坂 本 宏 信

2月の終りに友人と山陰へ旅した折、車中で読もうと用意した1冊の本は、私にとってショッキングだった。小椋桂氏著作「小椋桂いたずらに」は、歌を作った時々の心境を書き綴ったものであり、歌手以外の他面性をも垣間見せてくれた興味ある1冊であった。その影響か、書き始めた日記も大学ノート1冊分近くになった。

4月から教養部に籍を置くようになってから慌しい毎日を送っていて、自分の心に問いかけるゆとりもなく今日に至っている。多くの方が働いている教養部で精一杯働いて生きていたという証を刻み込めるよう頑張る所存です。現在書き綴っている日記をいつか読み返した折に悔いることのないよう前向きの姿勢を保っていきたいと考えている。

小椋桂氏ではないが、何面も兼ね備えた人間になりたいと思う。今の私にとりその余裕はないが、流れを1日も早くつかみ余裕をもって何事にも取り組みたいと考える。欲深き男ですが、御指導の程をお願いします。

松 本 敏 幸

“自己紹介”こんなこと何年ぶりかなあ……。確か中学に入学した時以来では……。

あれから？年、早いものである〔同期の桜も、今や中年の良きパパである〕。

正直なところ「作文」というやつは、昔から大の苦手で、困っているのだが、とにかくこの原稿用紙をぬりつぶさないことには、教養部の一員として、認めてもらえない雰囲気なのでがんばる事にしよう。

さて、早いもので神戸大学にお世話になって15年である。

医学部に始まり、農学部、文学部、そして現在である。

その間、朝から夜まで仕事に追われる毎日であった。が、その間隙をぬって人並に恋もし、失恋も経験して、現在の大きな自分を築いてまいりました。〔体重73kgの意味です〕。

本当にこれと言って何も取得のない私ですが、持って生れた財産が有るのです。

それは、「明るさ」・「オモシロさ」・「やさし

さ」です。

このムードを教養部の用度掛に、又事務室全体にひろめ、職場に出る（出勤）のが楽しい、職場に居る（友人関係）のがおもしろいと言うような声が上るように、少しでも役にたてたらと思います。

そうそう、仕事が抜けていました。どこかのCMではありませんが、「明るい職場」・「楽しい職場」・「やりやすい職場」では、仕事は自然に消化できるものと自負しています。

ながながと書いてきましたが、とにかく何事でもがんばりますので、どうぞよろしく。

高 松 肇

4月に医学部経理掛より配置換になってからはや5ヶ月が過ぎ最近やっと教養部に馴れてきた感があります。

最初、仕事はもちろん学生の多さ、スポーツ施設の多さに驚いていましたが、まわりの方々に迷惑をかけながらもなんとかやってきました。

又、グランドがあることは、少々？運動不足気味の私には大変ありがたく、できるだけ活用しているのですが、その効果はもう少し先のようです。

仕事その他みなさんの所へ伺うこともあると思いますが、用度掛で一番若いのが私です。

これからもよろしくお願い致します。（用度掛）

山 内 利 夫

4月1日から附属病院から教養部へ配置換となり早や3ヶ月、本来ならもう仕事にも馴れる頃ですが今だに自分自身の力量と勉強不足のせいで皆さんに面倒ばかりをおかけする毎日、日頃のご厚意には痛く感謝しています。のんびりとした性格のせいか仕事の判断が人よりも遅く、遅いだけならまだしもミス許りつづけて周囲の方達に大変迷惑をお掛けしています。本当に申し訳なく思っています。

病院では神戸大学の中で一番掛員が多い掛にいましたが、その中では年齢的にも経験年数の上でもいわゆる中堅の位置にいたのですが、こちらに来てからは今の掛の中では一番若い人で私と同じ年齢であとは皆さん年上の方達ばかりで、私自身そう若くはないのですが気分一新、一からやり直せる絶好のスタート機だと考えています。

一つ一つ仕事も覚えていき一日でも早く皆さん

の仲間入りをしたく思いますので今後ともよろしくお願いします。それからこちらではスポーツが盛んで私自身も昼休みにテニスを教えていただいています。それも教養部に来られた事の良かった点だと思っています。お暇な方がいましたら又テニスにでも誘っていただけたらと思います。よろしくお願いします。（教務掛）

仲 俊 之

昭和57年4月1日付で、教養部第二課程掛に採用されましたホヤホヤの職員です。

何をやるにしても、要領が悪く、失敗の連続でした。しかし、4ヶ月経った今、少しは慣れてきた感じがします。この4ヶ月間というのは、本当にあつという間でした。これからも、迷惑ばかりかけるとは思いますが、よろしくお願い致します。

ここで少し、私の事をお話します。

昭和34年10月13日生れの22才です。生れは大阪市内です。趣味は、ドライブ・旅行・レコード鑑賞、etc、…。見知らぬ所へ、ある日突然、あてもなく、ふらっと行くのが好きです。放浪癖があるのでしょうか。又、教養に来て、野球ができてとても満足しています。（第二課程掛）

仲 田 摩耶子

わたしは、この春、神戸大学農学部を卒業しました。でも農業については少しも知らないのです。農芸化学科でしたので、やることと言えば化学実験ばかり。あの広い農場には一度も行けなかったのは、今でも心残りです。その代わり、いろいろな工場見学に行ったりして工業のことには少し強くなりました。ともかく、なかなか楽しい学生時代でした。

4年前よりずっときれいになった教養部へ勤めてもう5ヶ月め。まだ学生のような気がして、ちっとも職員らしくなれないまま、夏休みになりました。学生達が休みに入ってガラとした校舎の中で初めて、「ああ、学生じゃないんだな」と思う始末です。

家は大阪市内で、毎日、梅田周辺の雑踏をくぐり抜けてかよっています。大阪はいつもオモチャ箱をひっくり返したような、おもしろい街でとても好きです。わりと体を動かすことの好きなちゃん娘ですが、おとなしく服を縫ったり料理なんかも好きです。精一杯明るく、頑張りたいと思い

当世中国見聞録

堀 信 夫

私は今年5月20日から27日までの8日間、俳文学会訪中代表団の一員として、北京、杭州、上海の三都市を回ってきた。その折の見聞や印象をこの紙面をかりて少々ご披露しておきたい。

漢 俳

日本の俳句を手本にした中国語の短詩を〈漢俳〉という。まだ生まれて二年にも満たぬ新体詩であるが、提唱者は大の親日家である趙樸初氏（中国仏教会会長）、林々氏（中国作家協会副会長）らである。両氏の説明によると、1980年の鑑真和尚像の里帰りの際、和尚像に対する芭蕉の献詠「若葉して御めの半ぬくはばや」を知って感激、中国の新しい民衆詩としての漢俳を創始したという。日本文化交流の歴史を正統に承継し文化運動といえよう。われわれは21日北京烤鸭店での歓迎晩餐会でも、22日北京飯店での答礼の宴でも、漢俳の将来を予祝して、何回となく〈漢俳に乾杯〉と盃を重ねたのであった。

姿 三 四 郎

北京飯店での答宴は夜8時でお開きとなった。当夜8時半からテレビで「姿三四郎」の放映が始まるからである。日中友好協会の村井氏の話によると、この姿三四郎の放映が始まると、映画館・街頭・店頭からすっかり人影がなくなるほど人気があるという。部屋に帰ってテレビを見ると、竹脇無我主演のテレビ劇であった。後日中国の友人に人気の秘密を聞くと、即座に「正義感と愛国心」と答えてくれた。

亭 主 関 白

テレビといえば、杭州飯店での歓迎晩餐会でのこと、中日交流協会のT氏が「昨夜〈理想的夫〉というキャンペーン番組が放映されたが、亭主関白を自認する小生としては、かかる俗悪番組は迷惑至極である」と力説していた。傍らの通訳張利々女史がニヤニヤしながら聞いていたが、酒の勢を借りるということほどこの国にもあるらしい。私が日中友好のあつい連帯感をこめて、T氏と固い握手を交したことはいうまでもない。

知 待 青 年

杭州の西湖は中国随一の風光明媚な保養地であり、文学遺跡の多い観光地でもある。24日午前11時頃、独りて湖畔を散歩していると、日本語のうまい青年K氏に声をかけられた。日本語の勉強のため少し一緒に歩かせてくれという。ラジオ講座

で覚えた日本語というが、通訳が勤まるほどのみごとなものであった。しばらく散歩して記念撮影、「謝々」「再見」と別れた。ところがなんと、翌日西冷橋のところで再び出会った。文字通り再見である。後日上海で、中国の事情通に「彼はいつ働いているのか」と尋ねたら「おそらく知識待業者、つまり失業青年というところでしょう」ということであった。

百 家 争 鳴

総じて中国の人びとは語学に堪能である。早朝西湖湖畔に出るとベンチというベンチに沢山の人が腰を下し、湖面に向かって大声を発している光景を見ることが出来る。めいめい英語・日本語・仏語などのラジオ講座のテキストを暗誦しているのである。彼等の半が出勤前の労働者や、登校前の学生達であるという。青年K氏の日本語も、こうして覚えたものなのであろう。

Party券135円也

中国一の名茶「竜井茶」の飲み過ぎで、少しCoffeeの禁断症状が出てきた。ホテルのロビーで一杯飲む。代金伍角也。日本円にして68円といったところか。味はインスタント・コーヒーより少しましな位である。またホテルのあちこちにDance partyの案内が貼ってある。参加料一元也（135円）は、これもまた安い。ただし、夜11時からというので参加は見合わせた。聞くところによると、ディスコ風の踊りもあったよしである。

（文学）



ます。どうぞよろしくお願い致します。
（化学教室）

堂 本 智 子

今年の3月に神戸大学農学部を卒業し、4月から教養部生物学教室の技術補佐員として勤務しております。初めのうちは、つい先日まで気楽な学生の身分で歩いていた、その同じ道を通勤するというので、何か恥ずかしいような懐かしいような不思議な気分がしたのですが、最近になってようやくそれにも慣れてまいりました。

私は大阪生まれの大阪育ちで、現在、大阪城の見える市内城東区に住んでいます。世が世なら「太閤さんのお膝元」とでも申しましょうか、天守閣を仰ぎ見ることができる、なかなか良い所です。高校時代は淑やかに茶華道部などに入っておりましたが、大学では心機一転、馬術部に入部し、以来、馬への愛慕捨て難く、今でも馬場の横を通る時には顔が馬小屋へ向いてしまいます。まだまだ学生気分の抜け切らないところがあり、仕事も不慣れですが頑張ります。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。
（生物学教室）

村 井 信 子

自己紹介をさせていただきます。神戸の垂水で生まれ育った生粋の神戸っ子、家は漁業を営んでいます。釣り船の相談がありましたら私が紹介させていただきます。（あっ、宣伝してしまいました。）この大学では、体育教室で仕事をしています。最近どうにか落ちついて仕事が出来るようになりました。先生方の数も多くやっとな顔と名前が一致しました。体育だからスポーツ万能と思っている人もいます。決してそうではありません。中学・高校では、軟式庭球をしていたので人並ぐらいは打てます。大学では、体育専攻で一通りの運動をしましたが、「うまい！」とは言えません。大学のクラブでは、創作ダンスに入っていました。（みなさん驚かれますが一見そのように見えないのでしょね!?）自分のできないことをやろうと思って入ったのですが思うように体が動かず悩みました。今では、創造力も豊かになり、体も采らかく思うように動かすことができるようになりました。（ほんとかな？）自分にとって非常にプラスになりました。ここでも持ち前のファイトで頑張ります。
（体育教室）

岡 崎 美 智 子

はじめまして、四月から図書館でお世話になっています岡崎美智子です。早いもので、神戸大学に来る様になって4ヶ月たちました。最近、ようやく仕事になれてきたのかなという気がしていますが、まだまだ自分の中で図書館員という感覚がしっくりきません。つい数カ月前までは、本を探してうろうろしていた人間が、カウンターの中で貸出業務をしているというのは自分でも不思議な気がしますし、書架を歩いているとついまだ学生の気分で本を手にとっていたりします。これから、とにかく自分の仕事をもっとスムーズにできる様に、また図書館のいろんなことにも目を向けていきたいと思っています。

さて、神戸大学にきてこの4ヶ月の間にいろんな方にお会いしました。私にとっては、最初の職場なので、「どんな所なのだろう」という不安があったわけですが、図書館の方はもちろん教室の方やいろんな方から声をかけていただいたり、誘っていただいたりして本当にうれしく思っています。これからも、何かといろんな事で、お世話になると思いますが、どうぞよろしくお願い致します。
（図書館整理掛）

川 島 慎 二

9月1日付で、滋賀大学教育学部学務係より神戸大学教養部学生掛に転任してきました。今思い出す事は、6年前の7月の事です。その頃私は、滋賀大学と神戸大学の面接を受けました。結果、滋賀大学に採用されることになった訳ですが、あと10分（いやあと5分かな……）神戸大学の採用内定通知が早ければ、滋賀大学での生活はなく、神戸大学に来る事になっていたと思います。それが今こうして窓から見えてくる、いままでと違った景色を見てみると、不思議で妙な気持ちになっています。あまりに突然でびっくりしたのと住みなれた滋賀大学を離れるのは思ひ難い思いをしました。が、初心に帰って一所懸命ガンバりますのでよろしくお願いします。

追伸

なんでもない球をファインプレーに見せる芸人、弱肩貸打でグラウンドを沸かした速選手です。よろしく。
（学生掛）

王 君 の 語 っ た こ と

居 安 正

忙しく忘れっぽい日本人のことであるから、いま問題になっている教科書検定をめぐる近隣諸国との問題も、この文章が活字になる頃には何らかの政治的決着がつけられ、忘れ去られているかもしれない。しかしそれゆえにこそ、この機会に伝えておきたいことがある。それはもう十数年もまえ、ひょっこり17、8年ぶりにやってきて、日本の繁栄を喜んでくれて台湾へ帰った友人が僕の脳裏に残した言葉である。

彼は王君という。すでに昔話と聞こえようが、王君はかつての日本の植民地台湾に生れた。彼は旧制中学に進学する能力を十分にもちながら、ただ彼が台湾人であるという理由だけで、日本人子弟を優先的に入学させる差別政策のため、台湾の中学へは入学できず、幼い身ではるばる一人海を渡って、そのような差別のない大阪の夜間中学（これじたいがまた戦前の社会的差別の産物であったが）に学ぶこととなった。身をもって日本帝国主義政策を体験した彼は、あの「聖戦」に酔っていた日本で、下校の車中に「蒋介石は偉い」などと公言してはばからず、われわれをはらはらさせた。

この王君が、荒廃した日本を去って台湾へ帰ったのは、日本の敗戦の翌年であった。

そのご文通は続いたが、久しく会うことのなかった彼がやってきたのが、十数年まえである。大学の工学部を出て発電所に就職した彼は、たまたまその発電所が日本の企業から発電機を購入し、技術指導を受けるため六ヶ月の予定で来日した。方々の工場を見学してまわり、大阪に滞在中に数回訪ねてくれ、つきぬ話に若い時代に帰って夜をふかしたことである。いろいろと語った彼の言葉のうち、忘れることのできないものが、二つある。

その一つは、ある日おだやかな調子ながら、かなりの憤懣を内にひめて、彼が日本の官吏について述べた言葉である。今はどうなっているかわからないが、当時は日本に滞在する外人は、滞在地を変えるたびに外務省の出先機関に届け出なければならなかった。ところが、この出先機関の官吏の王君たちに対する態度がきわめて横柄であるという。そして彼は、「僕たちが欧米人であれば、こんなことはないだろう」と言う。この言葉を聞いたとき、僕はハッと、かって日本が台湾や朝鮮や中国で行ったことを顧みて、彼の顔を正視できなかった。

いまひとつは、彼が工場でみた日本の労働者についての言葉がある。帰台も近づいたころやってきた彼は、話の前後は忘れたが、「日本人は上役に対して卑屈だ」という。日本社会になお近代的な人間関係が確立せず、企業内に封建的な身分秩序が根深く残っていることは、多くの人の指導するところである。しかし、これを王君から指摘されることは、僕には意外であった。というのも台湾は日本と同じか、あるいは日本よりおけているのではないかと思っていたからである。聞いてみると、台湾では日本のような卑屈な態度はみられないという。僕はまた自らを恥じた。僕もまたアジアのなかで日本がもっとも進んでいるといった、思い上った考えにとりつかれているのを知られたからである。

当時すでに日本は国民総生産が自由主義諸国中で第二位を占め、それとともに戦後しばらくはきびしい批判と反省の対象とされた「日本的なもの」が積極的な評価の対象となっていた。それは、日本の奇跡的な成長に対して生じた海外の日本ブームに応じるものであった。日本社会にかんする外人の著作もふえ、そのいくらかには僕も目を通した。しかし、それらの専門家の著作よりも、平凡な友人王君の右の二つの言葉のほうが、はるかに鋭く僕の胸にくい込んでいる。それはわれわれの醜い性格——相手が弱小であれば尊大となり、強大であれば卑屈となる権威主義的、事大主義的な性格を的確に指摘し、反省をせまるものだったからである。

そのごも日本の経済成長は、僕のこの小さな反省とはかかわりなく歩みを進め、日本は経済大国となった。そして、いつか日本人を12才と評したマッカーサーの国の社会学者から“Japan as No.1.”とおだてられると、かつては批判の対象としたものを、いい気になって讃美する風潮もみえる。だが、われわれは王君が指摘したわれわれの醜い性格を克服したであろうか。日本をたたえる外人ばかりではない。とりわけ近隣諸国は、われわれを欧米とは異った見方でみている。このことは今回の問題が明らかにしたところである。王君の言葉を耳にしてからもう十数年たつ。だが、かつて敗戦を終戦といいくるめた仕方、その見方を変えられると思っている人びとをなお政府にもつことを、僕は何とも残念に思い、また王君の顔が正視できない気がする。

（社会学）

体重29.8kg、栄養要注意要養護

渡 会 節 夫

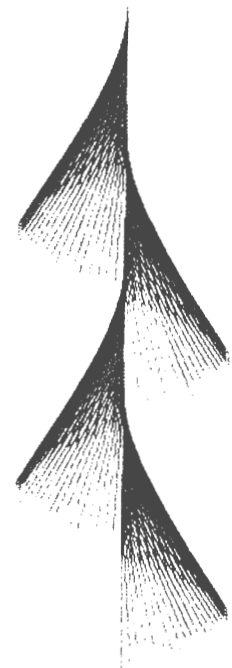
長く、そして暑い夏休みの最中、また戦後三十数回日の八月十五日を迎える。今年もまたこの日を中心に、テレビでは特集番組として第二次大戦時の戦中、敗戦そしてその後の日本・日本人の混乱した姿が放映されることだろう。昭和30年代後半に生まれた学生諸君達にとっては、白黒の映像のなかに父母あるいは祖父母の世代の日本人の姿があると説明されても、自分が生まれる十数年前のセピア色の写真葉を見せられるに似て、ただ戸惑いを感じるだけのものであろうか。というのも、戦争体験の未体験世代への語り継ぎの必要性が云われながら、自分自身の事情を振り返る時、残念ながら十分行なっているとはいいい難いと思うからである。また、最近一部の映画やアニメ作品の中には、“戦争もの”が若い人々に受けているということもきく。作品を見ずに意見を述べることは、的はずれかもしれないが、それらの作品が戦争賛美の内容ではないにしろ、戦争にともなう人間の行動の残酷さ、あるいは醜さが見逃されてはいないだろうか。

昭和20年、敗戦の年、中学2年生であった私達には、戦争に伴う過酷な嵐はむしろ敗戦後1～2年が最も激しかった。

先年、中学時代のクラス会誌に、X君は敗戦直後の思い出の記で次のように述べている。「中学三年生（昭和21年）の通知表の中の身体検査表が忘れようとしている思い出を苦々しく浮かべてくれるのです。身長147.4cm、体重29.8 kg、栄養要注意要養護とあります。そんな事はわざわざ校医先生から指摘されるまでもなく、私自身、誰よりも良く知っていました。然し、もう半月以上も、まともな魚や野菜はおろか、米粒の姿も見ない身で、どう栄養に注意し、どう養護せよと云うのでしょうか。……」、「当時の私が、人殺しや大それた悪事をしなかったのは、何も道徳心や倫理観からではなく、たまたまそのチャンスを得なかったか、それともそれだけの体力と勇気が無かったからに過ぎません。そんな私でしたから、小さな悪事は数限りなくやりました。野荒らしや、闇市での万引などは悪事の中に入りません。友人の家を訪問して、家人の目を盗んでの盗み喰い……あゝ、何故、私はこんな事を告白しているのだろう。」 X君と同じコースで通学していた私にも、

異常なほどの痩せ細った身体のX君の印象が残っている。しかし当時の食糧事情からすれば、私もそれ程変らなかつたのではないか、X君より背が低いだけに目立たなかつただけかも知れない。手元に昭和21年の資料がないので比較することが出来ないが、昭和22年、私の中学四年生（現在の高校一年生）の身体検査表の数値は、身長142.8cm、体重36.2kgが記されている。現在の小学4～5年生位の体格ではないだろうか。また、私自身も当時、何か食べる物をと、大阪駅前の闇市（現在の阪神百貨店附近？）を何度か一日中徘徊した記憶が今でも残っている。

なお、X君は現在名大教授のU君や、阪大教授のY君と共に、昭和23年の春、学制改革による中学校の新制高校への移管に伴う男女共学実施に、胸を躍らせていた我々を尻目に四年修了後旧制大阪高等学校に進学し、通常より一年早く大学を卒業後、現在、某一流企業の管理職として活躍しておられる。（化 学）



「広報」が61号になった。人にたとえれば還暦を過ぎ、新しい第一歩をまた踏み出したことになる。

——Rome was not built in a day——

これを機に、元教養部教授の先生がたにエッセイをお願いした。

数学教師50年生の今は

早 原 四 朗

教養部広報が発行される毎に私のような旧教官の許へもお贈り下さいまして、ありがたく拝読させて頂いています。殊に旧知の方々の記事は楽しく拝見して感謝しています。例えば、'66の森晴秀さんの情こまやかな名文なのでことがどう運ぶのかとハラハラしながら読み耽り続けた。森さんがこれほど植物に対する繊細な感情の持主であったとは大学紛争の頃の教授会の席での森さんしか知らない私には想像もつかず驚きました。またともに草花を愛する同好の人々の姿をこの広報記事の中に発見して嬉しかった。貴重な紙面を割愛して頂いたが、詩情豊かな文は書けないので近況報告で勘弁願います。

私は東大を卒業して50年になります。はじめの10年は豊中、新潟、高津中学に勤め、その頃は毎日補充教材のガリ版作りや放課後運動部員の相手に生徒に奉仕する日々でした。昭和17～24年は旧姫高教授であったが、戦時中の勤労奉仕、学徒動員や終戦後の食糧難時代で教官学生とも心身を消耗し学徒として実り少ない時期であった。

24～25年は神戸大学創設期で、教養委員として度々姫路分校主事のお伴で神戸へ通った苦勞を思い出す。30年頃から学生の学習心も高まり、数学同好会の形もでき、その指導役を勤めた。

私は卒業以来先生と仰ぐ人もなく独学でコツコツと数学の勉強をしていた。37年頃ミクシンスキーのあの大部500頁のOperational Calculusの本を見付け、面白く、有益なので翻訳を志したが、一早く京大等の3教官が翻訳権を占め、私の方はものにならなかった。然しこの本を克明に読んでいたので後の研究に花を咲かせることになった。

39年、姫路分校は御影分校と共に鶴甲に統合され、私ははるばる姫路から通勤する身になった。一方毎年の学生増で学生の面倒見もできず、さらに大学紛争の時代となり、学舎を封鎖する学生と

は異和感強く次第に学生とも疎遠になって行った。私は57才から方針を一変し、自分の勉強に重点を置き、理学部数学教室の外国雑誌を読み初めた。そこで Duffin, Duris: A convolution product for discrete function theory 1964を見付けた。

私はこの合成積の演算の逆算としてミクシンスキー流に離散解析関数の演算を導入して Duffinらの結果を拡張し、n変数の離散解析関数論を開拓したのが私の学位論文です。

1970年神戸大を定年退職し、岡山理大へ来て、71年 U.S.A の J. Math. Anal. へ論文を寄稿した。75年、雑誌「数学」へ「離散解析関数の理論」の総合報告をした。78年 W. Jentsch は Bemerkung zu den diskreten analytischen Funktionen で私の拡張した離散解析関数の定義に基づく差分方程式に関する論文を発表した。私はそれを見て、彼の手法を彼の旧論文を調べて理解することができた。この Jentsch の方法を新しい演算子法と名付け、初心者向きに構成し、実用的に多くの解法を例示し、81年9月に数学教師50年記念として発刊したのが早原、春本共著「新しい演算子法と離散解析関数論」である。

私の論文別刷送付の依頼状は日本国内からは皆無であるがヨーロッパ、カナダ、アメリカ、インド、台湾、その他から多くあった。台湾からは短期招へいの話もあったが、病身のため断念した。カナダ、ウオタール大の春本氏への別刷送付から同氏との交際が始まり、遂に春本氏を岡山理大の大学院教官として招来したので3年前である。この春本氏の協力により著書が世に出たわけですから。いま学部で授業や院生のゼミにテキストとして使用し演算子の概念を宣伝しているものです。

ここまで辛抱し読んで頂いた方を特に理科系の方々はもう少し辛抱して下さい。整数の積は整

数ですが整数 a、b に対し $x \nmid a = b$ となる x は整数とは限らない。われらの先祖は分数というものを考え出した。二つの連続関数 a(t) と b(t) の間に つぎの積分演算 * をほどこして c(t) を得たとき、これを

$$a(t) * b(t) = \int_0^t a(x) b(t-x) dx = c(t)$$

で表わす。逆に連続関数 b(t) と c(t) を勝手に与えたとき上式を満たす連続関数 a(t) があるとは限らない。演算 * の逆算として a(t) が存在しても、存在しなくても $a(t) = c(t) / b$ を導入して、これらを演算子という。新しい演算子法では二つの無限数列

$$\{a\} = \{a_0, a_1, \dots, a_n, \dots\}, \\ \{b\} = \{b_0, b_1, \dots, b_n, \dots\}$$

に対し、 $\{a\} * \{b\} = \{c\} = \{c_0, c_1, \dots, c_n, \dots\}$

$$c_0 = a_0 b_0, \quad c_1 = a_0 b_1 + a_1 b_0, \dots, \quad c_n = \sum_{r=0}^n a_r b_{n-r}, \dots$$

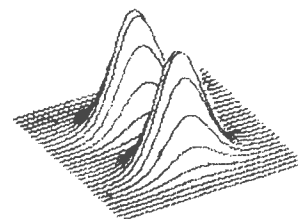
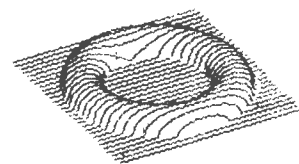
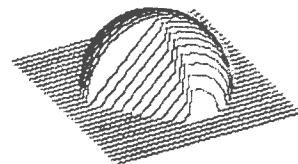
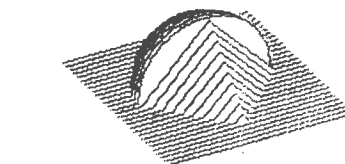
いわゆるコーシー積を演算 * にとった演算子法で、差分方程式の解法に活用される。

昨年秋私は梅田の紀伊国屋で「z 変換入門」という新刊書を手にして巻末の公式集をジツと見ているうちに拙書の公式に類似していることに気づき、その書を買って調べた結果、両者が同型であることを証明した。これを基に本年6月に z-Trans-

formation by the New Operator Methods, Proc. Jap. Acad. を発表した。また雑誌「数学セミナー」の演算子法特集号に載せた解説記事の中に「たとえて言うと宇宙空間の所産の実験工場が地球上にあつて z 変換という形ですでに用いられていたことになる。したがって演算子法に必要な諸公式は既知の z 変換の諸公式を転用すればよく、逆に z 変換を使用する工学者らはラプラス変換、複素関数論の基礎だけ学習すれば事足りるわけである… スペース・シャトルで宇宙旅行をやれば莫大な費用と十分な訓練準備が必要だが、われら数学者の宇宙旅行は頭脳さえ健全であればタダですむ。ありがたいことだ。アハハ……」とあるのは、われらの演算子法の効用を説いた解説である。このような話を交えてゼミ生に対して数学の解説を楽しんでいるのが教師50年生の近況であります。神戸大在職中から現在までにいろいろの病気を経験し、いろいろ入院手術を受けたが幸い退官後12年間生き続けている。ところが白内障の手術をしたが今は視力も弱まり、歩行も危険なので、もう教師も退職すべき時期だと見ています。それまでにもう一つ論文を書くべくこの夏も頑張りたい。

今朝もアメリカフヨウの大輪の花が朝日に輝いている。気持ちのよい朝だ。仕事もはかどるぞとレンズを通して辞書を引いている現状です。

(元教養部教授・数学)



こ の ご ろ

飯 盛 亨

「広報」58号に停年退官の挨拶《きょうなら》を書いてから、六甲台の西、伯母野山の松陰女子学院大学につとめて一年半。英文科学生へ専攻、経歴などを自己紹介の一節に「晩鐘を耳にしなが、中世の秋のみのりの落穂拾いを続けている」と書いた。たまたま手元にある「ヘボン和英語林集成」でGLEAN をひくと“ochido wo hirou”とある^(註)。いつもこんなことをしているわけではない。昨年担当の特殊講義の科目でアルファベットの由来をあつかい、その夏の公開講座に「ローマ字の話」をした。今年はその続きをすることになっている。

フェニキヤ文字を承けたギリシャ文字を、ローマ人はラテン文字としてヨーロッパ世界に広げたが、ギリシャ文字の流れをくむキリル文字（ロシア文字）は東ヨーロッパに傳った。つまり同じスラヴ族でもローマン・カトリックのポーランド、チェコなどはローマ字を使いながら、ギリシャ正教下のブルガリヤ、ロシア、セルビア語などはキリル文字を用いている。文字学者ディリンジャー氏はこれをAlphabet follows religion. と言っている。イスラム圏のアラビア文字もそうである。革命後1920年代に折角アラビア文字をやめ、ローマ字を使い始めていたソ連のトルコ語系アゼルバイジャン、キルギス、ウズベックは1940年以來キリル文字になった。Alphabet follows regime. と言えようか。同じ回教のトルコは第1次大戦後、大統領ケマル・パシャの英断によって、トルコ語の表記に不適當、不便なアラビア文字を改め、ローマ字を採用して今日に至っている。Alphabet follows reason. だと私は思う。表語表意文字である漢字の中国でも、國語羅馬字、拉丁化新文字の主張や運動があった。人民共和国成立後、拼音方案もきまり、簡体字、横書きもすすみ、まさに「文字改革」は百年の大計であろう。

しかし、何でもがrational にばかりゆくものではない。national なものが働く。三千年來ギリシャ人はその文字を守っている。新生イスラエルは古典ヘブル語を復活し、ヘブル文字を國字としている。漢字、假名併用の複雑な文字体系を持つ我々の文字問題意識も情理左右にゆれるのである。現在の我々の文字生活は特異な日本語と共に、左右両脳を動かし、日本人の活発な活動を生む、或は一つの要因になっているのかもしれない。理性・

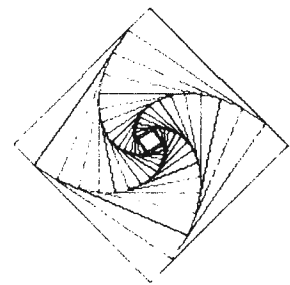
辺倒にはゆかない。実は私も、ラテン字の英語——もう今世紀完全に國際語となり、アングル（隅っこ）語などと云っておれない——から漢字へ親近感に移る。向英漢雨辺倒である。通勤の車中漢語の本を読むことがよくある。

この春は「対聯趣話」というのを讀んだ。對聯は中国の家屋の門や戸にはりつけた赤い紙に書かれた一種の二行詩である。春聯とも言う。互に各聯を応酬する智的遊戯の具にもなる。十九世紀末、侵略戦争発動の美英法俄德意奥日等八国との会談の席上、某帝國主義國家代表が傲然、「琵琶琴瑟八大王、王王在上」と上聯を示し、下聯をせまった。列車の中國人が言下に、「魑魅魍魎四小鬼、鬼鬼犯邊」と応じたという。路上で“I never make way for a fool.”と言った相手に、“Don't you? I always do.”としゃべり返し、道をゆすったエリザベス朝の文人の有名なreparteeを憶い出す。又、粵語童謡の小冊を英語のnursery rhyme と比べながら、讀んでたのしむ。

そして、村井弦斎の「食道楽」に、明治の氣骨と空想の馳走を味わい、時に現実の夫婦羅をたべながら、新聞の政治、社会面をながめつつ、O tempora! O mores! となげくこのごろ。（57. 8. 23）

（註）いつか教養部で讀んだテキストに、可愛い女の子の頬にpimple が、とあったのをpはdかと疑ったことがある。

（元教養部教授・英語、名誉教授）



中国政府派遣留学生紹介

私は■■■■と申します。今年の四月に中国からまいりました。今教養部で勉強しております。

日本へまいったばかりのとき、どうもなれなかったです。習慣が違いますし、また大学の生活も大部違っています。今もう五か月がたちまして、ずいぶんなれました。

困ることといたら、やっぱり言葉のことは一番の問題になります。しかし、日本人と一緒に生活して、だんだんなれると思っております。

名前：■■■■ 生年月日：■■■■
出身地：中華人民共和国湖北省武漢市
出身校：■■■■大学

性格：ちょっと引っ込み自案であって、自分一人でものごとを考えることが好きです。他の人と友達になりやすすくないですけれども、もし、友達になったら、きっといい仲間になるにちがいありません。

趣味：詩を読むことと、歌を歌うこと、そして、音楽を聞くことと、旅行をすること、恥ずかしな

がら、勉強をさばることも好きです。
一言：ぼくは祖国を離れて、日本へ留学に来るのは、単に法律を学ぶだけでなく、さらに、日本の社会を勉強することと、日本友好のことはもっと重要であると思います。だから、ぼくがここにいる四年間に、いろいろなことを教えていただきたいです。これから、いろいろよろしく願い致します。

日本へ来てもう三カ月もたちましたが、まだ来たばかりのような気がします。というのは友達もたくさんいるし、また見物とか、コンパとか、いろいろな活動もあるし、楽しんで過ごしてきたからです。

私の出身は中国山東省の青島です。神戸へ来て、第一の印象は“神戸には山もあるし、海もあるし、町もきれいです。青島と似ています。僕はもう好きになった……”です。

まだ一年生ですので、いろいろな本を讀んで、いろんな知識を身につけたいと思っておりますが、なかなか時間もあまりできないし、日本語も読みにくいので、あまり進めません。

神戸大学には各国の留学生がたくさんいるので、私はなるべく多くの留学生と一緒に遊んだり、話し合ったりして、思想を交流して、各国のことを知りたいと思っています。また、多くの人々に中国のことを理解してほしいと思っています。

教務掛の先生方や、留学生担当の先生方にはいろいろお世話になりまして、今後ますますお世話になると思いますが、たいへん感謝しております。

——私のこの一曲——

本や木とともに音楽は我々の生活の喜びを支える大きな柱である。編集委員会ではこのたび、日頃愛好しておられる数多くの曲の中から強いて一曲を選んで「私の「この一曲」」とし、それにまつわる思い出や想念を記して下さるようにと原稿を募った。いただいた原稿を見れば、長さもさまさま、取り上げた曲種もいろいろ、語られる局面も多種多様、文体も高雅な随筆調あり、世話に砕けた座談調ありで、音楽というものの一つに限ってもこれだけ異った文章が出て来るというのは、これ又人間界の多様性を語っていて面白い。

ヴィヴァルディの「アー・モル」

池 田 裕 司

ヴィヴァルディ作曲のイ短調の協奏曲について書いてみようと思っているが、どうなるやら……。作曲者名は、日本人は四季魔といわれる程だから、良く知られているし、この曲だって大抵の方は耳にした事があるだろうと思う。NHKのヴァイオリン教室をご覧になるのも良いでしょう。TVをお持ちでない文明の忘れ物の方々は近所で（なくても良い）ヴァイオリンをぶら下げて歩いている子供に聞けば分るし、場合によっては交番でも教えてくれる。バガニーニとは比較にならない程易しいのであるがファーストポジションだけでは弾けない。教養の数学程度である。先生の云う事を適当に聞いて、程々の努力をすれば一応単位はもらえるだろう。まだ能力を云々するレベルではあるまい。

さて、第一楽章第一小節には音符が1つしかない。Eの音であり、ボーイングはアップでフォルテの指示がある。ポジションの指定はないのだが悩む事はない。開放弦でギッとやってみれば良い。教わる立場で遠慮してはいけない。この位の事は出来る。生徒が弾かなきゃ音楽は始まらないし、先生だって教えようがない。音楽だと話が良く分るでしょう。第二小節ではサードポジションでAの音を取る。ここはテヌートの記号がついているがそれは余りやかましく云わない……何しろ

教養の数学だから……。しかし、音程が採れないと話にならない。局所的な音階とかリズムとかの訓練は講義が始まる前に自分でやって来るものだと思っているのである。とは云え、周波数カウンターで測って……多分測れない……880 でないからいけないなどとは決して云わない。多少のずれは大目に見るのが正しい。大幅にずれていると“ヴィヴァルディに悪いね”と云う穏やかな言葉と共に講義は全休止となる。こうおっしゃる先生が譜面の指示を変更する所がある。第25小節から27小節辺りの16分音符がズラーッと並ぶ所でスラーを後3つずつに付け変える。これは相手（筆者）を見てか、常識なのか判断はつかないのだが、NHKでもそうであったので一般的なのかも知れない。この変更は実に効果的なのである。と云うのは、お陰様で曲がりなりにも途切れずに通過出来るからである。この“途切れしない”と云うのは非常に大切な条件で、それが出来てやっと音楽を垣間見る事が出来る。

こんな乏しい経験ではあるが、今でも“これ一曲”はカンニングせずに弾けるし、他の数学の本だって読むに当たって最低限すべき努力の程度は心得ているような気になっているのであります。

（数 学）

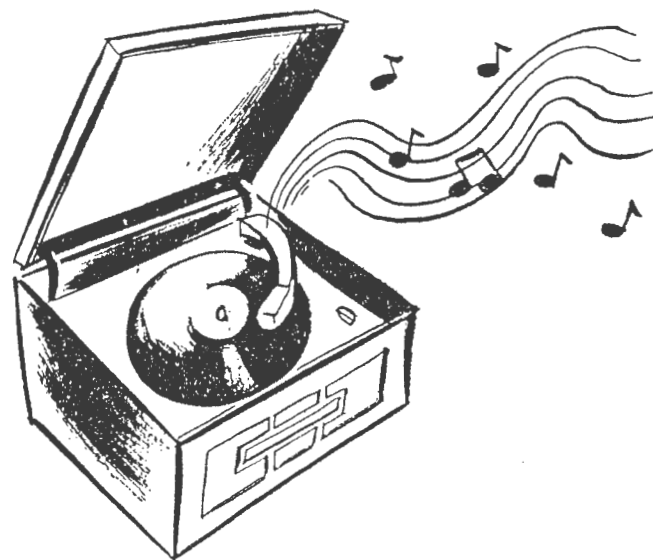
私は中国の江蘇省鎮江という所から日本にまいりました。鎮江は南京の近くでお酢の産地として全国で有名です。中国ではもし誰か鎮江へ行ったら必ずお酢を何瓶か買って持ち帰ります。もう習慣みたいになりました。だからこそ、もし日本のみなさんの誰かが中国へいきかいかがあったらぜひそのお酢を味わっていただきたいと思います。

私はことしの四月一日はじめて日本にきたのです。今農学部の一回生です。専攻は植物防疫で学部に入ったら遺伝についての勉強をする予定です。どうぞよろしくおねがい致します。

私の趣味としては卓球なのですがそんなに得意じゃなくてただ好きなだけです。残念ながら日本にきてから卓球クラブにはいらないとなかなか卓球がやられないのです。後期になったら体育授業でやれると聞きましたが今待っております。

勉強のほうではまだ困る事があります。日本語については聞きとれない所はまだ多いんです。英語は高校ではそんなにしっかりやらなかったのが今たいへんです。でもこれらは私がきらいというほどでもありません。私は自信を持って頑張っていこうと思います。これからの四年間、どうぞよろしくお願い致します。

（写真は左から、、、の各君。
奈良興福寺にて）



シューベルトの「未完成」 ——私のクラシック入門——

国 友 雅 之

私のクラシック入門は、ブルーノ・ワルター指揮ニューヨークフィルのシューベルトの交響曲第八番「未完成」である。

私の修士課程一回生というから、もう二十年近くも昔のことになる。その頃私は一人の女性に交際を求めて断られた。何回もの手紙の往復の末、やっと二人で斑鳩の里を一日散策して感激したのも束の間、折り返すように断りの手紙が来たのであった。「私は貴男とお付き合いのできるような女性ではございません。」という言葉は、裏返せば、「貴方は私の好みの男性ではございません。」であることが分らずに、その後も書き続けた手紙にととう返事は来なかった。気弱な私は奈良まで尋ねていく勇気がとうとう出なかったのである。あきらめようと思った。これが運命なのだとまで考えた。極端なことである。

このことを切っ掛けに、それまで音楽といえば流行歌しか聴かなかった私が一枚のクラシックレコードを買った。当時二千円は大金であったが傷心が癒されるのではないかという淡い期待があった。ブルーノ・ワルター指揮コロンビア交響楽団のベートベン交響曲第五番「運命」である。私はその当時、この有名な交響曲でさえ名前位しか知らなかった程のクラシック音痴であった。しかし当然のことながら「運命」はその時の私の心に共鳴するものとはならなかった。

この「運命」のB面に入っていたのが「未完成」であった。ある日、「運命」に失望した私は、これもその愛称しか知らなかったに過ぎない「未完成」をかけてみようと思った。大した期待があった訳ではなかった。それに当時の私の装置といえば、名の通りラジオに毛の生えた装置であった。ところが、第二楽章へ入って私は「未完成」に魅入った。その緩やかなワルターの演奏は、まさに深いロマン的情緒をた、え、傷心を癒すというよりは、むしろ傷心を更に掻きたてるが如きであったが、しかし、切々と訴えるように演奏される哀愁を帯びたメロディは、いつまでもそれに浸っていたいという思いを抱かせるものであった。

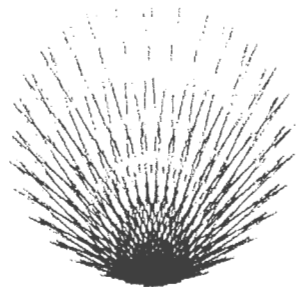
それ以来私は「未完成」のとりことなった。時々心理状態によって、いつでも曲に没れる訳でもなかったし、また、共鳴できない時もあったけれども、その後徐々に増えていった私のクラシ

ック・コレクションに、長い間「未完成」に代わる曲は加わらなかった。そのうち、切っ掛けとなった出来事は私の心から消え去っていったが、「未完成」の魅力だけは長く私の心に残ったのである。

このレコードは1958年の録音である。デジタル録音のような最新の録音に比べれば、周波数もダイナミックスもレンジは狭いし、テープヒスノイズも耳障りで、とても聞いたものではない。少しよいオーディオ装置を持ってから私は、ワルターに匹敵するロマン的情緒をた、えた名演で、しかも録音のよいものを捜し求めた。ペーム・ベルリンフィル、ジュリーニ・シカゴ響、クライバー・ウィーンフィル等。しかしワルターの如くに私を満足させる演奏を遂に発見できないでいる。クライバーなどは針を下ろしたとたん、余りにも勇まし過ぎる荒けずりの演奏に辟易して、すぐ針を上げ以後ずっとお蔵入りである。ペームもジュリーニももう一つびったりこない。

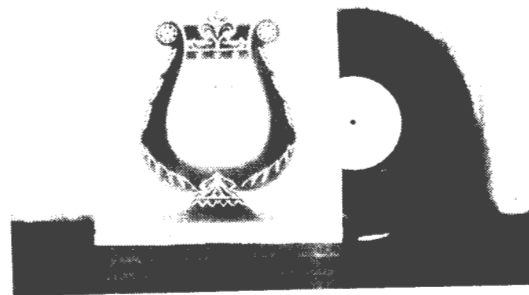
どんな曲でもたいてい初めて聴いた演奏に最も馴染みを覚え、他の演奏にはなかなか親しみが持てないものである。しかし、ワルターの「未完成」だけは私にそれ以上のものを与えてくれたと思っている。今でも時々取り出して聴いてみる。録音の悪さを越えて私を捉えるものがある。

学生時代に買ったレコードはもうすっかりすり減ってしまって、今はレコード棚の片すみに眠っている。現在のはその後買い求めた二代目である。(物理学)



ドヴォルザークのチェロ協奏曲

小 野 理 子



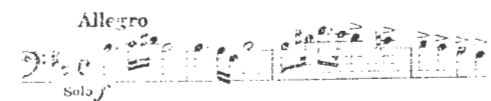
四分の一世紀も前の、古いレコードです。

アントニン・ドヴォルザーク「ヴィオロンチェロ・コンチェルト、ロ短調」チェロ独奏はM. ロストロポーヴィチ、指揮はタリヒ・チェコフィルハーモニー管弦楽団と、チェコ語で書いてあります。むろんステレオではありませんし、ずいぶん音質もいたんでいるのですが、今でも大切にしています。

愛着のゆえんはまずこれが私の自分で買った最初のレコードだったからです。私たちが学生の頃、日本ではレコードは相対的にずいぶん高価なもので、一般の学生には手が出ませんでした。「音楽喫茶」という、一杯のコーヒー代とひきかえに、クラシックなど聞かせる店がはやった時代でした。ところが卒業後まもなく行ったチェコスロヴァキアでは、音楽会の切符とかレコードとかはじゅうぶん庶民の手とどく所にあり、私もプラハ大学日本科の助手になってはじめてのお給料をもらうと、勇んで町のレコード屋に出かけました。そして二、三の希望のものを買ったわけですが、その時、店の女主人がこの協奏曲をすすめて、掛けて聞かせてくれたのです。ドヴォルザークといえば「新世界」くらいしか知らなかった私は、女主人の愛国心に敬意を表するつもりで耳を傾けるうち、すっかり気に入って、これも買ってしまいました。以来、度々の転居にも大切に持ってまわり、今日に至っています。

ドヴォルザーク(1841—1904)は、プラハに近いウタワ河沿いの町に生まれ、ヴィオラ奏者から作曲家になった人で、やや年長のスメタナとともに19世紀チェコ音楽を代表する人物として国民

の尊敬をあつめています。このチェロ協奏曲は、彼が1890年代にニューヨークに招かれ2年間音楽学校長をした時に書かれたものですが、ロマンチックでありながら抑制のきいた、ブラームス等に近づきながらいかにもチェコの、ひじょうに美しい曲です。第一楽章の第一主題がやわらかな木管ではじめられ、オーケストラによって盛り上げられたのち、ふいにチェロがうたいはじめると、いつものことながら胸が切なくなります。彼の地の自然やささまざまな人の面影がよみがえってくるからでもありましょうが、そんなことには無関係にも名曲の一つだと思います。



そして私が今もこのレコードを新しい演奏のものと取りかえる気になれないもう一つの理由は、ムスチスラフ・ロストロポーヴィチのチェロの音色です。現在では世界的音楽家として知られ、ソ連から亡命したのか一時出国にすぎないのか等噂の人物にもなっていますが(もっともモスクワの国営商店では今もこの人のレコードは沢山売られています)、この古いレコードは、彼が演奏家としての力量の頂点に近づきつつあった25、6才の時に録音されたもので、ゆたかな量感とみずみずしい抒情性、完璧なテクニックはそれ以後の誰のどの演奏よりもすぐれていると私には思えます。そして若いロシアの演奏家を迎えた(当時は市民感情はたいへん親ソ的でした)チェコフィルハーモニーの演奏も、伝統をしのばせるよくととのったものです。

録音技術も再生装置も近年はすさまじく進歩しましたが、年令とともに鈍化した聴覚には、古い公会堂で聞く音楽会を思い出させる人間的な、古びたレコードがちょうどよいのかも知れません。

(露 語)

バッハと私の記憶

——カンタータ147番中のコラール

「主よ、人の望みのよろこびよ」——

本田 烈

J.S. BACH Jesu, Joy of Man's Desiring

Chorale from Cantata No.147

PIANO SOLO ARRANGED BY
Myra Hess



二十年、いや、もっと昔だろうか。ミュンヘンが率いるシュトゥットガルト室内楽団だったか。場所はフェスティバルホールだったか。すべて記憶が薄れている。ただ、並んで座ったのが、一友人と、そして部長の井沢さんと三人だった事は確かだ。それに、曲目の中にバッハの「フーガの技法」があった事も確かだ。もちろん全曲は大変だから、抜粋で、その中に、未完で終わっている曲が入っていた。いや、それで終わっていた。その曲は、B-A-C-Hの音が第三主題として現れた辺りで途切れているので有名だ。演奏会では、そのままであるが恰好がつかぬ所為か、すぐ続けて「汝の御座の前に今われ進み出でて」というオルガン用コラールが演奏されるのが普通らしい。この曲には、バッハはこれに加筆し仕上げた直後に息を引きとった、といういわくが付いている。

しかし、このコラール、そのいわく程には価値

あるものとは見られていないらしい。まったく、賛美歌がおおむね退屈なのと同様、バッハのコラールも私には面白くない。このコラールもその例にもれないらしい。

では、ミュンヘンガーの音楽会ではどうだったかと言えば、この退屈なコラールではなかったのである。かわりに、表題にあげたコラールだったのである。

「フーガの技法」が、プチンと切れた瞬間、少々ばんやり聞いていた私の横で、「アッ、ここで終わっているんだ」と井沢さんが呟いた。ああそうだったのか、と私が納得する間もなく、この曲が流れ始めたのである。

耳にしたのはそれが初めてではなかった。学生時代にでも聞いているのだろう。そのかなり昔の記憶が、レミニサンスが、いまフェスティバルホールに座っている私に先ず語ったのは、「どうしてこんなに美しい曲を永いあいだお前は忘れておれたのか？」ということだった。ただもう只管に美しかった。そして、それまで聞いていた、しかつめらしいフーガの一切合切が頭から消えて了った。

曲名はその夜はまだ知らない。翌朝、音楽をやっている兄に電話をして、これこれの旋律で始まる曲は何か、と尋ねて、判明して、先ず買い求めた楽譜は簡単な合唱曲集であった。それがどうもピンと来ぬ。いや、考えてみれば、合唱が主旋律を四部で歌うのが主たる目的であって、私の魅せられた、背後に流れる部分はいわば付け足しなのだから、合唱曲としての譜でよい訳である。しかし私は不満であった。

当時は、ちょうどバロック音楽がもてはやされ出した頃だと思う。その潮流にのって、このコラールも屢々耳にするようになった。ジャズ風、ポップス風のアレンジも現れだした。私の楽譜も増えていった。ハモンドオルガン用の譜、エレクトーン用の譜、そしてピアノ用の譜、これには二つあって、まずマイラ・ヘスの編曲のものだ。これはディヌ・リパッティの名演奏のレコードと共に有名だ。ヘス自身のはいま聞けない。もうひとつは、ケンプの編曲によるものだ。こちらはケンプ自身

のが聞ける。

ろくそっぽ弾けないことは棚にあげておく。これらの譜、それぞれに私には大きい喜びの源となった。エレクトーン専用のは単調だから放っておき、ハモンド譜をエレクトーンで弾いた。今度はピアノ譜をピアノで弾いた。だが、エレクトーンにかかりっ切りになっている間はピアノが弾けず、ピアノに専念している間はエレクトーン上では指が戸惑った。鍵盤が三段と一段とでは音符の分担は当然ちがいが、私の手はそれにすぐ順応できなかったのである。

せんだってヨーロッパ旅行をした時、兄の先生で、ドイツに住みついている梶原完氏宅を訪れ、

モーツァルトのピアノ・ソナタ集

桜沢 正勝

毎日違った場所に行き、珍しい物を見、新しい人に会うというのも面白いことかも知れないが、同じ所、同じ物、同じ人に「馴染む」ことの方がより深い楽しみを覚えさせてくれるのではなからうか。

たとえば一つ所に十年も住むと自分の家から駅までの商店街に並んでいる店が、果物屋の次は電器屋、その向いは蒲団屋という風にほとんど空で言えるようになる。そして実際にそこを歩けば店の前を掃除している薬屋の主人に挨拶され、魚屋の奥さんはこちらの好物を知っていて生きのいい烏賊が入っていれば声を掛けてくれる。豆腐屋の角を曲って二軒目の塀からは木蓮の枝が覗いているのが分っているから、あの白い花はもう開いているだろうかとわざわざ角を曲ってみる。それが早春でなくて真夏ならば、そのもう二軒向うの家の百日紅に御機嫌を伺いに行くことになる。

このように自分の掌も同様に熟知した場所を歩き回り、馴染みの人や木に挨拶し、それが朝昼晩、春夏秋冬に示す変化を確認するというのは実に楽しいことである。

立派なベヒシュタインの前に冗談半分に座り、今では何とか暗譜をしている唯一のピアノ曲であるこの曲を弾いてみようとした。大先生の前だからという緊張など無い。どうせ素人芸だ。なのに、自分では不思議なほどに、最初はどの音を、どの指から弾き出すのか、まったく記憶がよみがえらない。旅の疲れ、旅の緊張ゆえであったのだろうか。私は蓋をしめて了った。

ドイツ国で、ベヒシュタインを相手に、生意気なことするんじゃない、この曲の美しさが泣く、とのバッハのお叱りであったようだ。

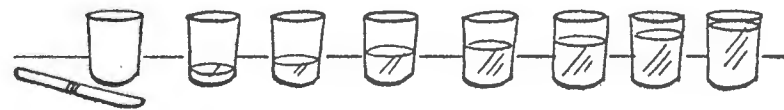
(仏語)

中学生の頃から主にラジオによってだが色々な音楽とつき合ってきて、いくつかの曲には今住んでいる大阪の巷同様に深く馴染んでいる。そういう曲では、この音の次にはあの音が、この楽句の次にはあの楽句が来ると分っているから、聞きながら馴染みの音や楽句を次々と迎える喜びは、自分の町を歩いていて八百屋の次は天婦羅屋、その次は酒屋という風によく知った店を迎えてゆくのと変らない。

そういう曲はいくつかあるが、最も昵懇なのはモーツァルトのK.279からK.576に至る十数曲のピアノ・ソナタである。ある時期には毎食前、食中、食後に聞いたこともある。

ただモーツァルトのピアノ・ソナタは、乱雑な貼紙広告や路上駐車や投げ棄てた空缶があつて時は心が曇る大阪の巷ではなくて、清く整ったヨーロッパの小邑である。家々の窓には白い網のカーテンと鉢植の花が輝き、空は青く、空気は清く、近くの森からは樹木の香が漂ってくる、理想の町である。

(独語)



中島みゆき「世情」(1978)

鍵 本 芳 雄

世にニューミュージックと呼ばれる歌曲多々あれど、中島みゆきの一連、といっても、1975頃から今日まで8年たらずにシンガーソングライターとして作詞作曲自唱でLPまたはEPで市販された曲101曲、他に作詞のみ他人(阿久悠)1曲、計102曲(近作「誘惑」(1982、4月発売)まで)はいい。これ以外に作詞作曲だけで他人が唱ったもの数曲と、1975の世界音楽祭グランプリ曲「時代」のEPジャケットにある「持ち歌百三十曲」—そのうち前記102曲に含まれたのはどれか知らない—は対象外として。

さて、何故、みゆきの作品が「いい」のか、そのうちで万止むをえず「からぞうきんをしぼるような感じで」(みゆき談=82、6、29朝日夕刊「新人国記“82”北海道⑩手作りの歌を求め、より」しぼり出した「世情」という曲が、何故特に「この一曲」なのか、は一寸あと。

実は私、数日後に、役員などしている大学図書館員の全国の研究会の年次大会の夜の余興に文化行事と銘打って、「中島みゆき論」を30分「講演」することになっており、その準備で頭が一杯で、しかもその次には、この会の月刊紙「大学の図書館」の秋の号に、「中島みゆき書誌」をのせる約束もあって……、いずれにせよこの広報がお目にとまる頃には、すべて結着がついているのだが、(「書誌」とは、その事項、人、を調べる文献資料リスト、解題等の総称。図書館員は、どんどん自分のできる事から書誌づくりを始めよう、と今運動をおこしかけている。この書誌がどんどん出来て各大学の図書館のカウンター要員が活用を始めたら、利用者、特に人文社会系の学生学習用、研究者の初歩、中級研究用に役立つこと今の何倍何十倍!その一番手のひとつにみゆきとは!)以下、文中の出版引用の参照は、ハンサだから最少限に止めて、詳しく調べたい向きは、秋(たぶん十月)以後、前掲「大学の図書館」をみて頂きたい。

さて、みゆきの歌は、前記朝日の記者によれば、「人との出会いや別れの物語だ」し、また詩人天沢退二郎によれば「別れの歌、恋人との別離というライトモチーフ——だれが名付けたか 私には／別れうた唄いの影がある／好きで別れ唄う筈もない／他に知らないから 口ずさむ(「わかれうた」)……右の四行はやはりこの詩人歌手の

自己規定として意味深い……この自己規定で“別れうた唄い”に一区切りつけるどころか……くりかえしうたわれる別離のモチーフ、しかも…単調・ワンパターンでない。……別離主題がまことにさまざまなシチュエーションの設定によって、委曲を尽して追求され……」ということになっている。たしかに、約百曲の80~90%はそういわれてもいい。しかし……。

子供の頃から色々種々聞きかじって、レハールにこり、ドボルザークにこり、サンサーンスにこり、演歌を祖国日本の民主化近代化を阻む文化敵視し(「ヨナ抜き短音階」つまりファとシがないということは、無限の可能・発展の音階を抹殺し単に音楽の自殺のみならず、その調(しらべ)に乗せる心を明治~十五年戦争の日本、せまい「日本の心」に閉じこめることではないか、逆コースではないか……)プロコフィエフに、ショスタコにこり、片っ方でクロード・モルガンの「人間のしるし」で、占領下のパリでナチス将校と、夫を捕虜収容所に奪われた妻とでモーツァルトを連弾して、心が通い合ったとの妻の手紙に、いみじくも芸術の「限界」にも、あるいは麻薬性にも気づき、もう片っ方でギンスバークだったかの「愛の詩もまた反戦詩だ」の言葉——戦争を拒否するのは何を守りたいからか、その「何」を歌うことの正しさに安住もしている——そんな私が、一寸やそっとの出会いと別れ、その委曲のつくしぎまに、五十面下げてコロリと参ると思うか。

さてこそ、愛の詩もまた反戦詩、悲しい別れは、望ましい連帯の詩ではないか。みゆきの様々な「委曲」をつくした悲しい別れには、常に自己反省を暗示し、「暗喩」し、あるいは「直喩」し(この「喩」も天沢説借用。)、別に「別れ」の反省だけが「喩」ではない。みゆきのあらゆるヴァース、句、語のイメージは、暗喩、直喩にみちあふれている。だから、悲しい別れに感情移入して共に落ち込む可、自分よりみゆきの方がより落ち込んでいることを見つけて元気をとりもどす可、しかし実は彼女も私達も、人は連帯を求めることを別れの底に、いな別れだからこそ連帯希求を心の中に気づかせ気づいているのでは。

この連帯志向が表に出た曲も数曲、すなわち、この時代の連帯に望みを託す、すくなくともちらりと見せている。冒頭の「時代」(1975)がその

典型。そして更に進んで、革新への希望をちらりと見せた(かどうか、私に見えただけなのか、あばたもえくぼなのか?)のがこの「世情」(1978)。

さて、その「えくぼ」を詩に沿って。

1. 世の中はいつも 変わっているから／頑固者だけが 悲しい思いをする／＝時代の発展変化が、とにもかくにも認識されている。それだけでも立派なものだ。この場合の頑固者は、原則を貫き通す立派な人でなくて、固定観念を変ええない、あるいは変える心算でも変れない、あるいは変える心算もない人々ととりた。自己批判もこめて。

／変わらないものを 何かにたとえて／その度崩れちゃ そいつのせいにする＝モロに「たとえ」が出てきた。ほんとにそうだね。この直喩、実にいろいろイメージがふくらむ。仕事するのにろくに調べも学びもせずに、自分の思っている考えだけで行動を起し、まず失敗まちがいないし、その時にうらむのは自分の固定観念、あるいは教条主義か経験主義、いずれも主観主義の現れ、とさる哲学入門はいう。みゆき、なかなか知っていてなかなかやる。しかしといて、みゆきは、すぐには動かない。そこが、またにくい。

(くり返し)シュプレヒコールの波 通り過ぎてゆく／変わらない夢を 流れに求めて＝変わらない夢、理想と言い直してみるか、次節にも同じ句が出てくる。よく聞きこまないと、こんがらがりますぞ。流れに求めて、変化発展の中に理想を実現しようとデモ隊が行く。ついでながらみゆきの唄い方は実に言葉がはっきりわかる。その詩語、平易な用語が多く使われているのを、漢字二字の理想とか変化とか発展とかに翻訳するのはどうも……。だがしかたがない。さて、みゆきは、デモ隊に通り過ぎ「られ」るのであって、彼女はデモには今の所加わらない。つまり見物しながら、別の曲で別れの悲しみを歌いつつ、連帯希求をはのめかす。しかし、デモ隊の目的は同感しつつ知っている!

時の流れを止めて 変わらない夢を／見たがる者たちと 戦うため＝いわく再軍備、いわく自由世界防衛、等々。核装備も五六中業も、教科書検定「侵略→進出」も時を、「止める」どころか逆にまわされて、みゆきさんもびっくり、いや知っていて「止めて」にまとめて喩えている。

2. 世の中はとて 臆病な猫だから／他愛のない嘘を いつもついている／包帯のような嘘を見破ることで／学者は世間を 見たような気になる／(以下1.のくりかえし三回)

怪解説はひとつだけ。別の哲学入門にいわく、真存在、実存、オントス・オーンですか。いや、先の哲学入門にいわく、本質ですよ、ただ、本質は現象を通じてしか現象しない。だから、「現象する」という言葉はあるが「本質する」とはいわないのだ。

「曲」を語らないかんのだが大体字だけで音楽を書かせるのは無理。みゆきの言葉のもつヨクヨウ(但し共通語に近い北海道弁)を、長短デリケートに、四拍子(C)の一小節を八分音符1と十六分音符2、次の八分音符1に前の十六分音符がタイ、といったように16ビートを8ビートの的に唱う(?)、一見ややこしく、しかし唱えば「言音一致」が実に上手にはかかれているこの曲は、LPを聞いてもらうしかしかたがない。

曲は男声コーラスの遠い声ではじまり、だんだん近づいて、そばに来たあたりで、みゆきの七色の声のうち低くてドスのきいた一寸なげやり(?)な太い声で、もいちど主詩をたっぷりずっしり聞かせ、1.のくり返し2回、2.のくり返し3回、更に男声コーラスがくり返しを受けて、まただんだん遠ざかってゆく。まさに見物のそばを通り過ぎてゆくデモ隊。この見事な喩えのダブル構造!。6分12秒。みゆきは原則としてTVに出ないし、ラジオも新曲はちょいちょい、ベスト10、20入りすれば毎晩の如くに何かは聞ける時もあるが、四年前の、あまり売れなかったLPに入っているだけのこの「世情」は、まずマスメディアでは聞けない。LPか、いくつか出ている楽譜全集、シリーズ中の1冊で、初見で弾く(ギター、ピアノ共に出版あり)か唱うしかないこの曲。

なお、補足。オリジナルキーはト短調だけど、ト長調的に唱うんだ。

きりがいい、終りようがないので……とにかく Repeat & F. O.

(図書館整理掛長)



ピート・シーガーと「腰まで泥まみれ」

中川 保雄

友人が送ってくれた『The Weavers Together Again』のテープを聴いて興奮した。1980年11月、25年ぶりにカーネギーホールでコンサートを開いたウィーバーズの歌うスペイン市民戦争の国際旅団の歌は歌手たちの年齢を感じさせない、大変力強いものであった。50年代に彼らによって歌われて大ヒットした「グッドナイト・アイリーン」で締めくくられたこのアルバムは、民衆とともに歌い続けてきた彼らの、後に生きる者への最後のメッセージとなった。メンバーの一人、リー・ヘイズはすでにこの世を去り、ロニー・ギルバート、フレッド・ヘラマンもこれが最後のステージとなるかも知れない。しかし彼らの声は今も若々しい。とりわけピート・シーガーは、全く衰えを感じさせない。

私がピート・シーガーに会ったのは、1967年の10月11日のことであるからもう15年も前になる。大阪で開かれた彼のコンサートのあと、先の友人と私などがピート・シーガーに会い、いろいろな質問をしたのであるが、そのとき彼は「この次に来たとき、髪の毛がまっしろになっていようが、すっかりハゲていようが、やっぱりこうやって聞きにきてくださることを祈らずにはいられない」と言ったことを思い出す。(私も、民衆の運動とフォーク・ソングとの関係について尋ねてみた。そのときの様子は三橋一夫著『フォーク・ソングの世界』(音楽の友社、1971)に再録されているので、興味のある方はその「ピート・シーガーとの会話」を参照されたい。) その彼は今、頭髮が白く薄くなっているが、相変わらず民衆の歌を力強くそして美しく歌い続けているのである。

ピート・シーガーが15年前のステージで歌った曲で、私が好きで今もよく聴く曲は「腰まで泥まみれ」、「第15旅団」などで、自ら口ずさんだりするのは「マライカ」などである。ベトナム戦争に反対して創られた「腰まで泥まみれ」は、当時大学に入ったばかりの中川五郎によって訳詩がつけられた。ぼくらは腰まで泥まみれだがバカは叫ぶ「進め!」、と歌われるこの歌を、昨年と今年、中川五郎やノーニクス・シンガーズが歌うのを聴いた。それはピート・シーガーの創った歌であり、ベトナム反戦のアメリカの歌であったが、いま日本の民衆に向けてこの歌が歌われている。腰まで泥まみれなのにもかからず、「進め



!」と命令されてすっかり泥の中に沈むか、それとも泥沼から抜け出すか、われわれも問われているのである。

ウィーバーズやピート・シーガーの歌がわれわれをひきつけるのは、そこに民衆の生活があるからである。映画「レッツ」の中でIWW(世界産業労働者団)の労働者たちが歌っていた歌は、ウィーバーズらによっても歌いつかれ、We Shall Not Be MovedやWhich Side Are You Onは今もアメリカ、ヨーロッパ、そして日本でも生き続けている。ピート・シーガーと同様に民衆の歌を発掘し、それをもとに新しい歌を創り歌ったチリのピオレータ・パラの「人生よありがとう」などのフォルクローレやロシア民謡も私の好んで聴く歌の分野である。その中で最も好きな歌手は、男性ではピート・シーガーであり、女性ではアルゼンチンのメルセデス・ソーサである。ピート・シーガーにもらったサイン、メルセデス・ソーサと交した二度の握手は、私の大切な思い出となっている。アメリカ史上空前の100万人の民衆が集まった6月12日のニューヨーク反核行動には、63歳のピート・シーガーの姿と歌があった。そのうちに新しいアルバムが出るのではないかと期待している。(自然科学史)

聞かれざる名曲?

風呂本 武敏

二十年も昔になるが、劇評もされていた山本修二先生のクラスでのことである。ロバート・リンダのエッセーを読んでいたが、或る学生が先生の訳と裏の註が異なるのを指摘したことがあった。この時、先生少しも騒がず「君、その註と僕の訳とどちらがいいかね」と問うて一呼吸、「僕の方がいいだろう、ね、そう思うだろう」と続けられた。この名優にも似た間合いでたたみかけられて、「いや先生そうは思えません」と答えられるのがいたらお目にかかるたい。もっともこれは今の話の枕で、さらに先生、半ばモノローグのように「この頃の学生はどうも活字を信用しすぎていかん」とつぶやかれた。

このような御教養は断片とはいえ妙に鮮明に覚えている。にもかかわらず活字を信用しすぎる習性だけはいつまでたっても脱けないようである。一般に我々は音や匂いは従で、視覚や触覚を絶対的に確実視するきらいがあるのではないか。しかし仮にそうであっても、音や匂いはその不確実性の故に、一度びその影響に感染してしまえば永続的な感化を受けることも考えられるのである。

ジェームス・ジョイスの短篇集に『ダブリン市民』というのがある。暗い北国的な様相のダブリンの市民の幾つかのポートレートをオムニバス風に綴ったものであるが、巻末を飾る中篇に「死者たち」というのがある。

主人公ゲイブリエルは叔母たちの恒例のクリスマス舞踏会に招かれている。

小トラブルはともかく、遂に予定のスピーチに入る。二人の叔母とその姪の三人の主人役を順にたたえて、パリス役のように三人の女神のどの魅力を採るか自分は迷うほどだと語り、自分のたとえ話にいささか得意になる。

こうしてパーティは成功のうちに終るのであるが掃りがけに二階から客の一人の歌う古いアイルランド歌謡が聞えて来る。その時ゲイブリエルは、皆の会話に加わらずその歌に耳をすます妻の美しさを誇りに思い、彼女への愛と欲望の幸福感にふるえるのである。

ところが帰宅し寝室で着替えている時に妻は先の「オークリムの乙女」の歌を想って泣くのである。彼女が昔西アイルランドのゴールウェイの祖母の許に居た時、彼女に恋をした若者がよく歌った歌だというのである。ゲイブリエルはその夜の

妻の美しさに愛と喜びと欲望を感じていた時に彼女の心を占めていたのが十七才の夭折した少年であったことを知って面目を失った気持ちにおそわれる。グレッタがダブリンの修道院に入るためゴールウェイを去る冬の雨の日、肺病をおしてその若者は会いに来る。彼は、もう生きたいとは思わないと言って塀の木のそばに立ちつくし、結局一週間して死んでしまう。

話しつかれて眠る妻を見ながらゲイブリエルは彼女の生涯における自分の詰らない役割に最早や苦痛も怒りも感じなかった。それは彼女が最早や美しさがあせたというのではなく、かつて一人の若者が死を賭して求めた姿ではないと判っていたからであり、さらには生きたくないと語った恋人の眼をこれほど長らく胸に秘めて来た妻のいじらしさへの想いであった。こうしてゲイブリエルがたどりついた結論は、齢と共に陰惨にあせ衰えてゆくより、何か情熱の眩しい陶醉に満ちて敢然と彼岸の世界へ赴く方がましだということである。そして外では全てを覆うようにクリスマスの雪が生者と死者の上に降り積るのであった。

この「オークリムの乙女」はその実在をめぐって色々論議されたが、ジョイスの手紙によれば妻ノーラとその母が知っていたゴールウェイ地方オークリム村が舞台の民謡である。歌の中味は領主に誘惑された農家の娘が赤ん坊を抱いて城を訪れる。領主の母は二人の約束の形見を確認すると領主は航海に出ていると言って追い返す。真実を知った領主が馬で追いかけるが娘はすでに海に身を投げた後である。

この「死者たち」の話が何とも言えず甘美な記憶となって我々をゆさぶるのは、この作品全体が一種の音楽的な響きを有しているせいだと思う。その響きとはグレッタの記憶の底からまばたきを送るマイケルの目のように、切れ切れに響いて来ては生者のおごりをたしなめる死者たちのざわめきと言える。活字の信じすぎを逃れるためには、このような音楽や匂いは有効かも知れない。そう思うからこそ私は実際の「オークリムの乙女」を聞くよりは、切れ切れの歌詞とリズムもメロディも不明なままの曲をこの作品に鳴り響かせておきたいのである。

(英語)

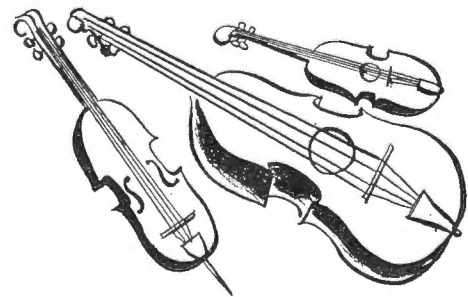
ブラームスの『第一番』

あるいは「昭和ブルース」

井 上 健

ブラームスの音楽というと、まずぼくたちの頭に浮ぶのは、『ヴァイオリン・ソナタ第三番ニ短調』に流れる屈折した抒情であり、『クラリネット五重奏曲ロ短調』に漂う晩秋の佇まいであろう。ことによると、ブラームスをブラームスたらしめているものは、何よりもこれらの室内楽曲に典型的な、クラリネット、ホルン、ヴィオラなどの渋く憂鬱な音色そのものであるのかもしれない。ブラームスはその音楽家としての力量を十全に発揮したという意味で傑作といえるのは、ハンスリックの激賞した『ヴァイオリン協奏曲』か、終楽章にパッサカリアをもつ『交響曲第四番ニ短調』あたりであろう。あるいは、音楽家ブラームスの生涯の総決算として、あの感銘深い『四つの厳粛の歌』をあげるべきなのかもしれない。だが、ぼくが長年愛聴してやまぬのはこれらの“傑作”や室内楽ではなく、『交響曲第一番ハ短調』であり、なかんずくその第一楽章である。ウン・ポコ・ソステヌートの長い序奏。弦の奏する旋律は、エネルギーな半音階的上昇を続け、その脆うさを超克して前進していく意志的姿勢によって、聴く者にどこかパセティックな印象を与えずにはおかない。序奏がフェイド・アウトしたあとの束の間の静寂がティンパニーによって破られ、いかにもブラームスらしい鬱屈した情熱を秘めた第一主題が、挑みかかると同時に開始されるのを耳にすると、いついかなるときでも奇妙な胸の高鳴りを覚えてしまう。

68年春から70年秋にかけての教養学部時代、多くの周囲には、政治的な、あるいは非政治的な、大小様々の共同体が形成されていた。今にして思



えばぼくたちが熱中していたのは「活字の置き換えや神様ごっこ」（鮎川信夫）に過ぎなかったのかもしれないが、チューザレ・パヴェーゼの言葉を借りていえば、「あの頃はいつもお祭りだった。……何もかも美しく、ことに夜はそうであった」（「美しい夏」）のであり、「あの年ぼくは一睡もしなかったのではないか」（「丘の上の悪魔」）というのもまんざら比喩とも思えぬほどであった。だが、秋の到来とともに、長く暑い夏の間に形成された様々の共同体はあっけないほど簡単に崩壊していく。吉本隆明が「とほくまでゆくんだ」と唄った現象は、吉本エビゴネンには無論のこと、吉本を否定する者の間にもかなり一般的となっていたように思う。当時の愛聴盤にベームがベルリン・フィルを振ったブラームスの『交響曲第一番』があった。ブラームスの交響曲には、ワルター、フルトヴェングラー、ミュンシュなどによる名盤があるし、ベームにはウィーン・フィルを振った新録音もあるのだが、こと『第一番』に関してはベルリン・フィルの音色とベームの武骨なまでの構築力こそが似つかわしい。当時のぼくが、力動感と構成感にあふれた第一楽章の冒頭に惹き付けられたのは、ブラームスの語り口のある種の生硬さに——いからせた肩、悲愴な表情に——いたく共感したからに相違なからう。

「生まれたときが悪いのかそれとも俺が悪いのか／何もしないで生きてゆくならそれはたやすいことだけだ」ザ・ブルーベル・シンガースの歌う「昭和ブルース」がヒットしたのは、ちょうど、大学入学以来の祝祭的な季節が終焉して少したったころのように思われる。暑く長かった夏の、石のごとく重い心象を持て余しながら酩酊しつつこの歌詞を口誦んだとき、しばしば脳裏をかすめた旋律はブラームスの『交響曲第一番』のそれであった。ブラームスには迷惑な話かもしれないが、ブラームスが自己の四つの交響曲の出発点というべき『第一番』の冒頭をあんなんにもパセティックに響かせたのは、ブラームス自身が「生れたときが悪」かったロマン主義者であったからのように感じられてならなかった。こういう聴き方は邪道なのだろうが、「遅れてきた」ロマン主義者としてのブラームスに愛着を覚えるようになったのはそれ以来である。（英 語）

バッハの「オペラ音楽」のこと

広 森 勝 久

2. 3年前の年の暮のことであったか、ボクはさる著名なレコード店で輸入盤をあさっていた。ふつうの国内盤のカタログにないレコードをこうして探すのも音盤収集の楽しみの1つで、ポーランド・バロック期のレクイエムなどという珍盤に出くわしたりすれば、もうゴキゲンになってしまうのだ。その日はボーナスが出たばかりで、懐中には女房から支給された1万円札があり、今日はこれがレコードに変身してもトヤカク文句は言われないという、滅多にない幸福な日であった（ルンルンという言葉はまだなかったが）。ところがこういう時に限ってコレという掘出物がない。あらかた物色してしまっ、残るはハコ入りのセット物のコーナーだが、これは大抵、オペラの全曲盤だ。ボクはオペラが苦手であるし、外盤のセット物はリスクが大きい（1枚でもキズがあったりすれば、まず交換は不可能だから、セットごと買い直さねばならぬ）。中身を調べさせてくれない店でこういうモノには手を出さぬがよい——という訳で、いつもはこういうコーナーは敬遠するのだが、その日は虫の知らせとでもいうか、何か立ち去り難い気分、ハコ入りのレコードを1つ1つ検分していったものだ。予期のとおり、オペラとかブルックナーの交響曲全集とかが並んでいたが、ハコとハコのあいだからヒョイと1枚物のレコードが顔を出し、見れば「バッハのオペラ音楽」と手書きした付箋がついている。オペラのレコードだからというのでこんな所に放り込まれたらしいが、これはスゴイものが見つかった！

*

念のため少し説明するなら、大バッハことヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1685-1750）の現存する作品は、いわゆるBWV番号で1080まである（この内には偽作と判明したもの、またその他の新発見も若干ある）。BWV1から524までは声楽曲で、カンタータ、モテト、ミサ曲、受難曲、オラトリオ、コラールなどの宗教曲が大部分を占める（一部に世俗カンタータもある）。バッハの音楽の真髄は何といってもこれらの教会音楽にあり、2大傑作『ミサ曲ロ短調』と『マタイ受難曲』をカール・リヒターのレコードで聴いた鮮烈な印象は、同じ経験のある方にはおわかりいただけよう。

残りのBWV525以下は器楽曲で、オルガン曲、クラヴィーア曲、リュート曲、室内楽曲、協奏曲

・管弦楽曲と続き、最後に楽器の指定が明らかでない「特殊作品」のグループがある。ポピュラーな『ブランデンブルク協奏曲（6曲）』、『管弦楽曲組（4曲）』を初めとして、生命と音楽の歓びにあふれた愛すべき作品の数々である。

つまり、バッハの作品表にはオペラの類は毛先ほども見出だされない。当時、オペラはイタリアを中心に大流行し、ドイツでも人気を博しつつあったが、バッハは教会と宮廷のオルガニスト、宮廷楽長、教会の合唱長を務めあげたのであり、およそ劇音楽とは無縁の生涯をおくったとされている。

*

そういう次第であるから、「バッハのオペラ音楽」のレコードを前にしてボクの胸は高鳴った。いかにオペラが苦手とはいえ、バッハのものなら話は別だ。バッハの伝記をかきかえる新発見の曲のレコードか！ ふるえる手で（？）おそろおそろそのレコードをとり出して見たが、ジャケットのオモテは付箋にかくれてタイトルは読めず、演奏者のKarl Münchinger という字だけが見える。レーベルはDeccaである。これはチト雲行きが怪しくなってきた。ミュンヒンガーがオペラをデッカに録音なんてニュースがあったかしらん？ 期待は不安に変わる。レコードをひっくり返してジャケットのウラを見ると、「J.S. Bach, Musikalisches Opfer」とあった！

善意に解釈すれば、レコード店の店員が“Opfer”を“Oper”と読み違えたのであろう。Operならば確かにオペラである。だが“f”があるとないとはツキとスッポンだ。荷札のことをエフという。荷札ならぬ付箋がエフだから、Opferのエフはもういらんという訳か！

店員もドジだが、自分もドジだった。モーツァルトのちょっとした曲の新発見が普通の新聞のコラムに載る時代である。バッハのオペラなどというものが見つかったらマス・コミを賑わし、音楽学者たちはハチの巣をつついたような大騒ぎをするだろう。そんなもののレコードが何の前触れもなく店頭に残るはずもない。

もちろん、Opferとは英語のOfferingであり、これは有名な『音楽の捧げもの』のレコードにすぎなかったのである。それもミュンヒンガーのレコードとは、何かの因縁であろうか。というのは、

他ならぬミュンヒンガー指揮シュトゥットガルト室内オケで『音楽の捧げもの』を聴いた忘れられないコンサートの体験があるからである。

*

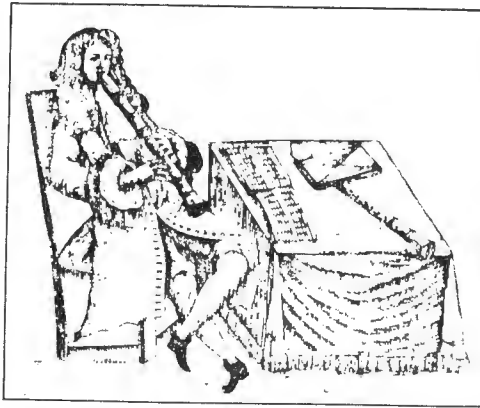
1747年5月7日の日曜日、老バッハはライプツィヒからプロイセンの音楽愛好君主フリードリヒ大王の招きでポツダムを訪れた。それには大王にお気に入りの楽士として仕える次男カール・フィリップ・エマヌエルに生まれた初孫の顔を見たいという動機もあったらしい。バッハは到着するや否や、旅装を解く暇もなく宮廷に迎え入れられ、大王が自ら与えたテーマでフーガの即興演奏をして、王を喜ばせたという。

その後、この即興演奏に手を加え、大仰な献辞とともに王に2度に分けて献呈されたのが今に伝わる『音楽の捧げもの』(BWV 1079)である。当時印刷されたいわゆる「原典版」では、王の主題による短かいカノンが10曲、3声のリチェルカーレ、6声のリチェルカーレおよびトリオ・ソナタがある順序で配列されている。これらの内でトリオ・ソナタと2曲のカノンを除いては楽器の指定がない。また、ある音楽学者によれば、この「原典版」の曲の順序にも問題があって、印刷業者がドジをしてメチャメチャにしてしまったのではないかという。さらには、原譜には逆さになった音部記号だの、「求めよ、されば見出ださん」というラテン語の文字だとかが記されてあって、これらを解釈しないと演奏は不可能である。

そこで現在の『捧げもの』の演奏では、楽器編成や曲順をふくめ、さまざまなやり方が可能であり、これらをきき比べる面白さもあるという訳だ。

*

1976年6月16日、神戸文化ホールでのミュンヒンガーの『捧げもの』は弦合奏を主体にして、まず3声のリチェルカーレ、続いて10曲のカノンをまとめて演奏、ここで指揮者と奏者の大部分はステージの奥に引込み、ヴァイオリン、フルートそれに通奏低音のチェンバロとチェロの4人の奏者によってトリオ・ソナタが演奏された。冒頭楽章のラルゴをヴァイオリンと通奏低音が静かにひき出し、フルートが追いかけるように入って、美しい旋律を歌いかわす。第2楽章はテンポの早いアレグロで、そのやりとりは次第に白熱化し、このあたりからボクは身体中が熱くなるような興奮を覚えた。第3楽章はアリア風のアンダンテで、物思いに沈んだ対話が時の去るのを惜しむように紡ぎ出される。終楽章は再びアレグロになり、せきたてるような通奏低音によってフルートが歌い始め、やがてヴァイオリンが加わるとバッハの



書法はいよいよ冴えて、クライマックスを形づくる。4楽章の典型的な教会ソナタ形式でかかれたこのトリオ・ソナタは『捧げもの』の内でも白眉とされる佳曲であるが、当夜の演奏は圧巻であった。

トリオ・ソナタが終ると、聴衆の拍手を制止するかのように全奏者がすばやくもとの席に着き、最後にミュンヒンガーの棒で6声のリチェルカーレをぶ厚いハーモニーで盛り上げて、全曲が閉じられた。

それまでにも『捧げもの』のいくつかの演奏を聴いたことはあり、面白い曲だとは思っていたが、これほどの内容のある音楽とは認識していなかった。さまざまな対位法の書法を寸分違わず駆使しながらも、いささかも技巧倒れにならず、味わい深い果実を結びえたのは、さすがバッハという他はない。

ミュンヒンガー以下、楽員たちもじつに誠実にバッハを演奏していた。ちょうどボクの席からはトリオ・ソナタを奏するチェリストの顔がまともに見え、彼が真っ赤になって音楽に没入している表情は今でもまざまざと思い起こすことができるまったく、ナマ演奏ならではの感銘であった

*

現在、手元には12種類の『音楽の捧げもの』のレコードがあり、同曲異盤の数としては我がコレクション中の第2位である。ミュンヒンガーはこの曲をステレオで2度(モノラルでも1回)録音していて、旧録音のレコードはコンサートに同伴した当時独身のある女性から贈られた記念のものである。「オペラ音楽」と誤解されたのはこれと同じものであろうが、ジャケットのデザインがまるで違っていたのでイッパイくわされてしまったその後、ミュンヒンガーの新盤が出て、その録音の日付を見ると1976年7月となっているから、来日から帰国後すぐに録音されたことになる。ちょうど彼らがこの曲を手がけて油ののった頃のナ

マ演奏が聴けた訳であり、その点でも幸運だった。

『捧げもの』の推せん盤としては、このミュンヒンガーの新盤(あのコンサートとほとんど変らぬ演奏が聴ける)とカール・リヒター、ジャン・フランソワ・ハイヤールそれにルドルフ・バウムガルトナーの4枚をあげておこう。

レコードにない演奏では、東ドイツのドイツ民主ラジオが「ヘルマン・ベルナー版」と銘打って作成した愉快なテープ(1975年10月、NHKFMで放送)および小林道夫氏を中心にやはりNHKFMでスタジオからナマ放送された演奏(1980年3月)が特筆に値する。

*

これら、それぞれの演奏家の持味を生かした『捧げもの』を聴くと、バッハの音楽がじつに多様な表現を許容する恰幅のよさをもっているのに驚ろかされる。クラヴィア曲のヘルムート・ヴァルハとグレン・グールドを比べてみるのもいいだろう。「ブラジル風バッハ」もあれば、ジャズ調バッハだってそれなりにサマになる。もともと、カラヤンの「バッハ」にはギャラの皮算用をしているスーパースターの顔がチラチラする。まじめなカール・ベームがバロック音楽に手を出さな

ったのは正解だった。ベームはよきロマン派の末裔たる最後の巨匠だったのだから。

バッハの音楽は目立ちたがりもしないし、ブリッコぶることもない。それでいて、コラールのちょとしたハーモニーにも、チェンバロの一節にも、紛れもないバッハの響きがある。こけおどしやカラフルな色づけは通用しない。演奏家にとっては、心の奥まで見透かされてしまう怖い音楽であろう。それは聴く者にとっても同じで、『マタイ』のレコードなどをとり出すには相当の覚悟を要するのだ。しかしバロック音楽はもともと多くがイージー・リスニングである。しかめっ面は半年に1度位で結構。肩の力を抜いて耳を傾ければ、バッハがこの上もなくナウな音楽であることがわかりただけよう。

モーツァルト、ベートーヴェン以後の音楽家たちはお抱え楽士でない独立した芸術家の道を求め、自らの個性を芸術作品に刻印した。いまだ前近代的な時代——芸術の概念すら曖昧であった時代に生きたバッハ、まもなく生誕300年を迎えるバッハをしてこれほど底深い音楽をかくことを可能にしたのは何であったのだろうか?

(数 学)



大阪の古本屋

西 光 義 弘

最近の古本屋で特異な現象といえば、漫画本と映画のパンフレットが売られるようになったことであろう。そのせいか若い学生風の人達が古本屋で座り込んで掘出し物を探している姿がよく見られるようになった。勿論このような人達は同年代の人達の中でも少数の例外であろう。大多数の学生諸君は古本屋といえば、ビニ本を売っているところと認識していることであろう。確かに店によっては余りにもビニ本がのさばっていて、女性やまじめな人には入りにくいところもあるし、誤解を受けやすいことはあると思われる。少々状況が違うが、現に筆者自身が7、8年前に自分の授業の試験の監督をしていた時に、ある学生が答案を提出しながら、意味ありげに「先生をこの間天満で見ましたよ。先生も好きですね」と言ったことがあった。そう言えばそのちょっと前に確かに天満にある二軒の古書店に行ったことを思いだした。そのすぐ近くに有名なストリップ劇場があることも事実である。その学生がどんな用事でそのあたりに居たのかは知らないが、筆者がストリップ劇場に行ったのだと誤解してもやむを得ない状況であったといえよう。

ビニ本のおかげで古本屋に入りにくくなっているが、古本屋には大きな魅力があり、一度やみつきになればやめられない。本稿では大阪の古本屋の紹介を行ない、各々の店の特徴を伝授することとする。古本屋めぐりをするにあたって二つの大きなタブーがある。一つは必ず一人でもまわることであり、もう一つは穴場の古本屋を他人に教えないことである。ここではあえてこの二番目のタブーを破って、^⑩情報を教えようというのである。勿論とおきの情報は公開されるとは限らないから、それは自ら古本屋めぐりをするなかで見つけてもらいたい。

大阪の古書店の最近の新しい傾向といえば郊外の古書店が店出して古書街を形成して、阪急梅田のかっぱ横丁とナンバCITYの大阪球場なんばん古書街が出来たことであろう。前者には元々13軒の古書店がのきを連ねていたが、洋書の古書を取り扱って特徴のあった紀伊国屋古書部が模様変えて新刊コミックの専門店になったのはファンの一人だった筆者にとっては非常に残念である。もっとも今の方がお客の数が断然多いようであるが。かっぱ横丁の阪急古書のまちは家賃が高いせいか

古書価も割と高いようである。それでも時々掘出し物を見つけることもあるから見逃すわけにゆかない。12軒の古書店の特徴を一つ一つあげるにはスペースが足りないで自分で行って見つけ出してほしい。

もう一方のなんばん古書街は14軒の古書店が入っており、値段も割合安く、掘出し物も割合よく出るようである。難点は場所がナンバCITYの最南端であり、なんば駅(地下鉄と南海)からかなり歩かないといけないことであろう。

今までにあげた二ヶ所に次いで古書店がかたまっているのは大阪駅前第一ビルの一階で、4軒の古書店が並んでいる。この4軒はそれぞれ独自の性格を持っていて面白い。

この他のところは離れてポツポツと古書店があるので、自分でコースを設定して、順次能率的にまわる必要がある。

まず心斎橋からなんば方面のコースを紹介しよう。まず地下鉄心斎橋駅の大丸・そごう入口側の出口からデパートの反対側の御堂筋の通りに入る。そしてなんばに向って歩くと三菱銀行のある角に出る。そこを右にまがるといわゆるアメリカ村がある。そのアメリカ村に隣接してあるのが天牛書店の周防町店である。有名な天牛新一郎翁の孫が経営している店で、店内はひろびろとしていて、休憩して自動販売機の飲物を飲めるコーナーもある。値段はかなり良心的。洋書も多く、全般的に品数が多い。ここできけば天牛新一郎翁が未だ行なっている近くの店を教えてください。是非一度大阪の古書店の名物の新一郎翁の顔と客に対する物腰に接しておくことをすすめるものである。

御堂筋を更に南下するとカエデ書店が反対側の通りにある。以前は英仏の原書が多く特徴のある店であったが、現在はまったく別の特徴を持つ店になってしまった。その次に行くのが天地書房千日前店である。この店は出版されたばかりの本を2〜3割引で売っているので、新刊書店に行く前に求める本が出ていのかどうか確かめるべき店である。そこから法善寺横丁のある路地をぬけて出るのが中座前の天牛本店である。値段は普通程度、品数が豊富である。天牛新一郎翁の娘むこが経営する店であり、昨年店主が店の前で立小便していた浮浪者をみとがめて、手にけがをした事件を未

だ覚えている人もいようであろう。その次に飲み屋、バー、キャバレーの中にあるイサオ書店がある。ここに行く途中の道は呼び込みのお兄さん達がしつこいので用心の必要あり。それから日本橋筋に出て、日本橋ブックセンターの店が3軒並んでいるのをのぞく。更に通りを渡って望月書店をのぞく。この店は値段が安く、掘出し物も時々ある。暇があれば、更に宮本書店に行く。この店は猫がのさばっていて、時々本に猫のフンがついているが、和服姿の女店主が特有である。

もう一つの大きなコースは阿倍野のコースである。地下鉄天王寺駅を降りてまずアベノセンタービル地下一階の古書ろん天地に行く。この店は新しい本を3割以上の値引きで売っている。また4月初めの2割引きの日が楽しみであり、そうなるとう結局定価の半額くらいで買えるというわけ

ある。そこから丸富書店に行く。品数は多くないが、時々珍しい本がある。後は阿倍野筋に沿って歩くと藤井天海堂とコセキ書店がある。また阿倍野斎場の交差点で左にまがれば古書店が少しずつ距離をおいて3軒ある。

この他に主なところは国鉄阪和線の南田辺駅の周辺に3〜4軒あるし、関西大学の前に2軒、大阪大学の石橋駅あたりに2軒あり、洋書の好きな人は京阪香里園駅前のポピー・ビル2階の関西ブックセンターがあり、掘出し物がよくあり値段が安い上本町の天地書房などがある。更に詳しいことを知りたい人は古書店の店頭で200円で売っている『大阪古書店案内114』という114軒の古書店の紹介と地図をつけた小冊子を買うと便利であろう。(英 語)

やったぜ 根性の初優勝!!

教養部職員野球部



神戸大学には教職員で構成する学内野球リーグというのがあり、部局単位に現在8チームで競技しています。この学内リーグにおいて9年目にして初めて、教養部チームが優勝しました。我チームは、全員野球をモットーにしており、まさに、全員で勝ち得たこの優勝はすばらしいものです。

我々の練習する時間は昼休みしかありませんが、そんな中で技を磨き、チーム作りをしていくのを支えて下さった山中監督に「ありがとうございます」と言いたい。我々は山中監督に打撃、守備についてコーチしていただいたのも大きな支えになりましたが、もう一つ大きな支えがありました。このもう一つは、支えてもらったというより支えさせたといった方がよいと思いますが、いつごろ

からだったか思い出せませんが、教養部チームが連勝街道を歩み始めたころ、選手の誰かが「優勝したら山中先生の退職金を前借りしてもらって、家族含めて5名までハワイ(海外)へ招待してもらおうな!!」と言ったのが始まりで、それからというもの選手一丸となって合言葉は「ハワイへ行こう」で頑張りました。その甲斐あってか最終試合待たずして優勝してしまったのです。山中監督も試合に勝つたび笑顔で選手を迎えて下さっていましたが、さぞかしハワイへの不安があったことだと思います。

このような純粋な気持ちで頑張っている我々です。すので応援して下さい。(追伸 ハワイ行きはV4したらということでオマケしてあげました。)

教養部の虫たち

木 庭 宏

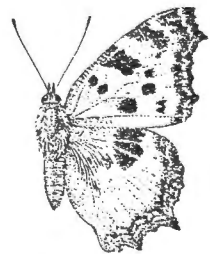
広報60号には、生物学の湯木先生による教養部植物についての紹介、更には物理学・斎藤先生の興味深い考察が掲載されている。今度は教養部の昆虫、特に蝶のことを、という編集者からの依頼である。

植物には根がある。だから紹介は比較的簡単である。キャンパスのどこそこにどういう草木が生えている、といったふうに記述できるのである。しかし蝶には、羽根があって根がない。このため植物とは違って、教養部の蝶、教養部に「定住」する蝶といった言い方ができないのである。彼らの大抵は住所不定で、キャンパスの花に飛来したり、涼しい木陰に憩ったり、あるいはそそくさと通り過ぎてゆく客人たちでしかない。アゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、ルリタテハ、アカタテハ、ヒメアカタテハ、ツマグロヒョウモン、アサギマダラ等々がそうで、さすが六甲山である、町中で見られぬ珍客たちも多い——もっとも教養部キ。キャンパス内の植物に寄生し、繁殖を繰り返す定住者たちもいくらかはいる。大根とモンシロチョウ、ハギとキチョウやツバメシジミ、カタバミとヤマトシジミ、ギシギシとベニシジミ、ササやシバとヒメウラナミジャノメ、クスとアオスジアゲハ等々である。広報60号に挙げられた植物の奇種・珍種を食草とする蝶はいないものであろうか。アカンサス、エビネラン等々の優美な葉や花を一夜にして丸裸にし、斎藤、湯木両先生の顔をなからしめるような貪婪な蝶（の幼虫）はいないものかと思うのだが、残念ながら、（いや、幸いなことに）蝶類にはモンクロシャチホコ（蛾である）のような不埒者はいない。せめて雑食性のヒメアカタテハに期待……いや、注意する必要があるだろう。

さて、以上の定住者たちはごくありふれた種類であるが、教養部から少し出て、馬場の北側、本

部の方に上ってゆく道路わきに行ってみると、いくらか面白い蝶に出会う。ここにはエノキ、クヌギ、クリ、ヤシャブシ等の繁みがある。エノキを食草とするゴマダラチョウ、テングチョウ、ヒオドシチョウ。ことに6月上旬羽化したばかりのヒオドシチョウは美しい。まさに「緋緋の鎧」のように鮮やかである。今年も六月の初め、白いガードレールの上にとまった、かえりたてのヒオドシチョウを見かけたものである。クヌギの木は樹液を出しているらしく、上述の蝶にくわえキタテハ、キマダラヒカゲなども集まってくる。ムンムンとむせるような臭のする白いクリの花にも好んで蝶たちが集まる。ゼフィルス（ミドリシジミの類）が来てはいないか、とクリの木の下を通るたびに見上げるのだが、一向それとおぼしきものは見当らない。神大内ではこの馬場の北側に蝶たちの最も良い住みかの一つのようなのである。さきに述べたものの他に、ルリシジミ、ウラギンシジミ、イチモンジチョウ、コムシジミが見られ、さらには、この世のものとは思えぬほど美しいアサギマダラが紙飛行機のように山上から舞い下りてくるのを目撃したこともある……。

というわけで、教養部キャンパスに住まう蝶たちの間にはさして珍しいものはいないということになるのだが、ここで、恐らくは教養部創設以来の真正正銘のわれわれの同僚、ハンミョウ（斑猫）のことを述べておかねばなるまい。念のために言っておくが、これは蝶でなく、体長2センチほどの甲虫である。主に赤、白、青緑色から成るまだら模様をもち、金属光沢があってなかなか美しい。舗装道路に慣れた現在の学生諸君にはあまりなじみのない虫であろう。かつてはしかし、山道を行けばよく見掛けたものである。人が近づくと、請われもせずまるで道案内でもするかのように先へ先へと飛んでゆく。「みちしるべ」、「みちおしえ」と呼ばれるのはこのためである。町中で育った私は、これを捕えたときにはまるで鬼の首でも取ったようにうれしく思ったものである。ニワハンミョウ、コニワハンミョウ等さまざまな種類があるのだが、なかでも本家のこのハンミョウが最も大きく、最も美しい。手で掴むとミカンのような臭がする。かまれぬように用心しなければならない。鎌のような大きく鋭い口をしている。小昆虫を捕食するために必要なのである。幼虫も肉食

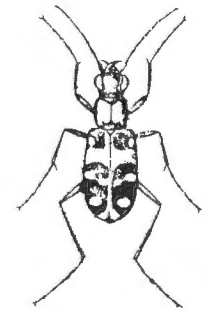


ヒオドシチョウ

性で、地中に穴を堀って住む。だから道路の舗装はハンミョウらにとって死活問題なのである。

さて、この宝物のようなハンミョウが教養部キャンパスの古くからの住人だというわけである。バレーボールやバトミントンの足、ゴルフのクラブ等の威にさらされながら、D棟東側の空地、C棟西のテニスコート周辺に棲息している。舗装道路と車輪に追われてここに逃げ込み、細々と生計を立てているという感じである。5月～9月にかけて何度か発生を繰り返す。先日も新しい発生をみたようだ。今は夏休みである。車も人の足も恐れる必要はない。ハンミョウものんびりと暑中休暇を楽しんでいるようである。

（独 語）



ハンミョウ

さんまは目黒、うどんは讃岐

鎌 田 道 生

久しぶりにお盆に故郷に帰った。宇高連絡船にのると、それがいつもの習慣で船尾の上部甲板へうどんを食べに出掛けた。上へあがる階段のところすでに行列が見られた。はたしてそれは、うどんを求める帰郷の人々の蛭々長蛇の列であった。ネクタイをきちんと締めた初老の紳士、着飾った中年婦人、Tシャツにジーパンの若者、小中学生達、様々な階層、年齢の人々が、蒸暑い潮風の甲板に辛抱強く並んでいる。これは儀式、四国へ、讃岐へ渡る通過儀礼だ。幾ばくかの感慨を抱いて人々は、この単純素朴な食物に向う。掛け、きつね、てんぷらの三種類しかない。だが、やや太めの柔く、それでいて腰の強い麺に細ねぎ、鳴戸巻きの浮かんだどんぶりを手に、点在する青く煙る島影を眼で追い、周囲に飛び交うお国なまりを聴いていると、帰郷という言葉が胸に迫ってくる。空くのを待って、ようやくうどんにありつけたのは、もう高松の港が眼前に大きく開けて来たときであった。

今は吉野川から水を引いて来て水問題は解決したそうだが、讃岐の国は昔から水不足に苦しんで来た。北海道に次いで降水量が少ないので、大阪府に続いて二番目に小さな面積ながら、有数の溜め池保有県だそう。平野のあちこちに丘のように散在する盛り上った溜め池、そして天井川、今や完全に姿を消した海岸につらなっていた塩田、これらが子供時代の風景であった。うどんは、この旱魃に見舞われることの多かった讃岐の非常食

として発達したそうである。それ故、うどんは人々の生活の隅々にまで入りこみ、食生活にしっかりと根を下している。子供時代の昼食は大抵、うどんであった。素うどんを数杯、それも面倒な時は、玉に生醤油をぶっかけてただけで何杯も食べる。それだけ町の製麺所の手打うどんは美味だった。小麦と塩と水、それだけが原料である。何かの行事があると家庭でもうどんを打つ。近所の男達が集まり、練った粉を晒しに包み、苺蓆に巻いて足で踏む。寝かして暫く後、椀の麺棒で、諸肌を脱いで玉の汗をしたたらせながら生地を座布団状に伸ばしてゆく、そいつを折り畳み、長方形の巨大なうどん包丁で裁断してゆく。大釜に煮えたぎる熱湯に放り込まれたうどんは数分後には、艶やかで粘っこそうな黄白の肌をみせて浮き上って来る。井戸水で晒し、ぬめりをとって箸に打ちあげられたその姿。それだけで胃の腑を刺激する魅力があった。巨大な盥に水を張り、遊ぶうどんを取り囲み、茶碗に入れた炒り子をもとに作っただしに取りわけて食う盥うどん、これも祝宴の始まりの儀式、団欒の和を目する一行事であった。また、うどん腹という言葉もある。うどんは間食、正式の食事にあらずという意味である。今なお、コーヒ・ブレイクの代りに、うどんをすすめる人達も居る。喫茶店にうどんを置いてあるところが如何にも讃岐らしい。

もう何年も前になるが、少年時の記憶を呼び醒まし、本の助けを借りて手打ちうどんを作りはじ

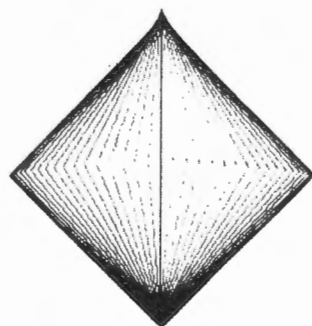
めた。小麦粉は、讃岐産に限るなどと煩いことは云わぬ。カナダ産の中力粉、無き場合は強力六分に、薄力四分、塩水の加減は寒三温六、つまり夏は冬の二倍、練り具合は耳たぶの柔らかさ、晒しに衛生のためビニールの風呂敷を巻き踏むこと数十回、麵棒は櫟の木、さるスナックで知り合った同郷の大工の棟梁にロハで戴いた。但し、この御礼にこのスナックで手打うどんの無料サービスを行なう破目になってしまった。包丁は阿倍野筋で求めた銘入りの代物、うどんの太さ細さはその日の気分次第、だしは面倒ゆえ、鯖と鰯の削りぶし、薬味は細ねぎとおろししょうが、冷しか釜上げが一番である。何のことはない、数百年に渡って受け継がれて来た素朴な食事を、神話的に反復している訳である。

街を歩いていて、「讃岐うどん」、「手打ちうどん」という看板を見つけると、腹事情が許せば大抵飛びこむことにしている。十中八九失望する。寿司の上品、下品は卵巻きの味で分かるそうだが、うどんのそれは、まず生地の良いさにかかっている。従って、ざるうどん専門の注文となるが、関西は総じて、生地が柔らかすぎる。こんなふやけたうどんなんか、食えるかい、と啖呵を切り、「讃岐うどん」の看板を下ろしてしまえ、と言いたくなるが、数多の亭主の話に依れば、固いしゃきとしたのは、もてないのだそうだ。関東へ行けば、草

加せんべい風に、ぱりっとしたうどんがあるかと思っただがこれは一段と事情が悪い。真黒のだしの中に、生い立ちの雪身を隠すように麵が浮いている。東京では蕎麦しか食べない。次いでだし、だしはだし、麵は麵と、木に竹を接いだように二つがなじまないうどんがある。極上の中華そばのスープのような、天界地界の、山海の妙味を混ぜ合わせたような黄金の味を求めることは所詮無理ながら、せめてだしと麵が渾然一体となった、つまりうどんにだしなく、うどんに麵なく、ただあるのは複合体としてのうどんそのもののみという姿が望まれる。

帰郷すると、新しいうどん屋を訪れるのが常だが、今年は少々上品な店を訪ねた。最近の流行だそうだが、農村の旧家が座敷を開放したうどん屋であった。見越しの松に蔵屋敷、苔むす庭の飛び石を踏んで座敷に上れば、一寸しゃれた庭景色、畳を踏んで絣の女性が塗り物の膳にうどんを運んでくる。美事な鉢に盛られたうどんは京都風に上品な味、上品な量、上品な値段であった。マイカーの発達がこの流行をまねいたらしい。非常食も行きつくところまで来たようである。だが、私には街中の名も売れぬ店で作られる大地の香りを持ったうどんが懐しい。食は広州にあり、うどんは讃州にあり。(8、16)

(独 語)



I was highly intrigued recently while perusing an article about a most unusual man, Mr. Buckminster Fuller. This gentleman is now 86 years old, an acclaimed genius who became wealthy without ever having to hold a job. He accumulated his wealth by his innovative--and sometimes outlandish--ideas and inventions. He is one of the world's leading thinker; a scientist with a long list of credits beside his name. His best-known invention is the geodesic dome, a structure with a higher strength-to-mass ratio than any other kind of building.

Peering into the future, Mr. Fuller envisions the possibility, within the next 20 years, of a world where nobody would need to work for a living, and in which all the world's people would be integrated, having relinquished their nationalities.

The key to this, according to Mr. Fuller, is that human beings--(who are the earth's only problem-solvers)--will find that personal integrity and unselfishness are the only means by which mankind can survive.

Well-spoken by Mr. Fuller. And easier said than done, to say the least. But even though it may seem unrealistic that all the people in the world could ever agree on anything, there is a golden nugget of truth in what he says. Personal integrity and unselfishness translate into cooperation, and cooperation is, indeed, the best way to get things done.

While hoping for that kind of integrity to develop on a world scale, I can't help feeling the same way about some other things, much closer to our own life situations. No earth-shaking, perhaps, and certainly not life-or-death issues, but significant in terms of how we are shaping up as decent human beings.

For example, in the classroom. I couldn't possibly count the times I've had to plead or admonish or speak sharply in order to gain attention. Short-term visitors to Japan tend to think of the Japanese people as extremely courteous and polite. It's hard to believe that in this country, students can be so unruly---even rude---in a classroom. If I were alone in thinking this way, I'd never print it. But the fact is that among the teachers I've talked to, whether foreign or Japanese, nearly all hold the same opinion.

I usually stress to my classes that cooperation (that is, listening courteously to the person who has the floor) is the key word. Scholastic or athletic competition is great, but vocal competition during class should never happen. If we can't cooperate among ourselves in a classroom, how can we ever hope to cooperate with strangers, on a world level?

Unfortunately, this behavior isn't limited to students. Many adults (professors included! Gasp!) are equally guilty. I've been to meetings and functions where the speaker literally had to shout in order to be understood by those who wanted to hear.

It's probably too late for adults to kick this habit, but students who want to reach out and learn all they can should give cooperation a chance. One learns more by listening.

学生による広報活動——放送委員会

私達、神戸大学放送委員会（略称、KUBC）は、昨年映画研究部から独立し設立された、まだ新しいクラブです。毎日神戸大学で起る珍事件や、各クラブ、サークルの行事その他の話題を集め、みなさんにお知らせしようと頑張っています。

今まで大学の放送部と言えば、オーディオ中心でラジオドラマ制作、将来のプロ・アナウンサー養成をする所というイメージがありましたが、KUBCでは流行に乗り遅れることなく、ビデオを取り入れています。学内行事はもちろん、「ビデオに収める価値あるものならなんでも」という意気込みで、学園祭でもなければ、教官・職員以外男子禁制の松蔭女子学院大学に、男ばかりのメンバーでビデオ片手に「こんにちば」友枝松蔭学長にもインタビューし、オリエンタルホテル直営の食堂でお昼を御馳走になった1年生もいます。（六月祭でビデオ放映済み）

ところが、ビデオは学園祭やサークル・オリエンテーションの時しか放映の機会がありませんので、ビデオで取材しテープをストックする一方で、ラジオのトランスミッターを購入し、FM電波を飛ばすことにしました。法律で許可された範囲でしか放送できませんので、今のところ学館から放送し、教養部前庭・食堂の辺りで聴取可能というぐらいです。また、学館や教養部には館内放送施設がありますので、それを使用して番組を流せばなあと思ひ、交渉中です。

これらビデオ・ラジオと並んで、放送委員会という名でありながら情報紙「KUBC PRESS」を発行しています。B5版8ページから12ページ立て、「サークル・オリエンテーション特集」

「就職特集」等を入れると、年7・8号出るようになります。プレスは、ビデオ・ラジオで提供し切れなかったりメディアとして適さなかったりするニュースを載せていますが、記事集め、写真撮影からタイプ打ち、タイトルのレタリング、紙面レイアウト、配布までみんな自分達でしています。今年の夏休みなどは臨時増刊「就職特集号」のため大阪・神戸の代表的な企業数十社の人事課を白シャツ・紺のスラックスかスカートという恰好で訪問し、1年生・2年生まで会社訪問のノウハウを叩き込まれ、部員の中では社会人養成クラブの異名まで出ました。就職活動を始められる時には、どこの人事課は麦茶が出るかコーヒーが出るかと

というような事まで、なんなりとKUBCにお聞き下さい。

このように、ビデオ・ラジオ・プレスの三つのメディアを通しての広報活動に取り組んでいるKUBCですが、4年生が抜けた後、2年生2人、1年生9人という寂しい人数。非常に忙しいので、特に美術・写真・アナウンス・広告に興味のある人を募集しています。ただし「KUBC3つの誓い 1正しい報道を 2人を傷つけない報道を 3みんなで神戸大学を盛り上げるような記事を」が覚えられ、協調性のある人なら大歓迎です。情報紙を出したり、カメラを持ってうろうろしているので、よく新聞会や写真部と間違えられますが、学園祭でオレンジトレナーを着、緑の腕章をしている私達は KUBC神戸大学放送委員会です。現在、六甲祭の準備とラジオの試験放送とプレス11月号の編集をしていますので、どうぞよろしく。

（本学学生）



（活動風景）

人事異動

(57. 9. 1)

57. 3. 31	化学教室技術補佐員	岩 田 佳 子	3月30日限り退職
"	生物学教室技術補佐員	鈴木 陽 子	"
"	体育教室事務補佐員	廣 山 芳 子	"
"	整理掛事務補佐員	安 井 玲 子	"
"	用度掛作業員	池 田 ウ ト	辞 職
57. 4. 1	経理掛警務員	山 田 助治郎	"
"	事務長補佐	尾 崎 豊	工学部事務長補佐へ
"	第二課程掛長	石 川 富士雄	理学部教務学生掛長へ
"	用度掛主任	後藤田 益 弘	兵庫教育大学厚生掛長へ
"	第二課程掛主任	野 上 清 博	学生課課外活動掛主任へ
"	庶務掛文部事務官	前 田 敏 夫	医療技術短期大学部事務掛へ
"	経理掛文部事務官	小 関 和 俊	経理課共済組合掛へ
"	教務掛文部事務官	吉 原 直 樹	法学部第二課程掛へ
"	"	安 藤 昭 治	入学主幹教務掛へ（併任）
"	学生掛文部事務官	菅 政 裕	工学部教務学生掛へ
"	事務長補佐	前 田 直 弘	昇任(庶務課総務掛長より)
"	第二課程掛長	吉 岡 矜 持	昇任(教養部庶務掛主任より)
"	第二課程掛主任	幸 田 洋 子	昇任(附属病院医事掛より)
"	庶務掛主任	岸 本 光 義	工学部庶務掛主任より
"	庶務掛文部事務官	坂 本 宏 信	経営学部庶務掛より
"	用度掛文部事務官	松 本 敏 幸	文学部会計掛より
"	"	高 松 肇	医学部経理掛より
"	教務掛文部事務官	山 内 利 夫	附属病院医事掛より
"	第二課程掛文部事務官	仲 俊 之	採 用
"	化学教室技術補佐員	仲 田 摩耶子	"
"	生物学教室技術補佐員	堂 本 智 子	"
"	体育教室事務補佐員	榎 井 信 子	"
"	整理掛事務補佐員	岡 崎 美智子	"
"	保管運用掛事務補佐員	山 本 博 子	"
57. 4. 6	独語教授	古 塚 隆 朗	死 亡
57. 4. 12	学生掛事務補佐員	市 来 千恵子	採 用
57. 6. 7	英語教授	木 村 守 雄	死 亡
57. 6. 11	学生掛事務補佐員	市 来 千恵子	6月10日限り退職
57. 7. 20	学生掛主任	岩 井 た い	死 亡
57. 8. 1	物理学助手	原 俊 雄	採 用
57. 8. 16	独語教授	得 津 伸 三	昇 任
57. 9. 1	保健体育助手	河 辺 章 子	採 用
"	学生掛文部事務官	川 嶋 慎 二	滋賀大学教育学部より

◎医学部(昭和55年度入学者)進学者数等一覧表

対象学生数	進学者		原級者	
	人数	比率	人数	比率
121	107	88.4	14	11.6

参 考

◎過去5年間の医学部進学者数等一覧表

進学年月	対象学生数	進学者		原級者	
		人数	比率	人数	比率
52年4月	118	111	94.1	7	5.9
53年4月	121	113	93.4	8	6.6
54年4月	113	106	93.8	7	6.2
55年4月	120	110	91.7	10	8.3
56年4月	122	94	77.0	28	23.0

◎昭和57年4月進学予定者数一覧表

			在籍者数		進 学 予 定 者 数				原級者数		進 学 率		56.4進学率	
			計	無 条 件		条 件 付		計	計	%	%	%	%	
					計		計							
法学部	8 0 Y 生	51	80	23	24	13	17	41	15	39	70.6	51.3	77.4	49.5
	原 級 生	29		1		4		24	17.2		10.5			
経済学部	8 0 Y 生	41	94	24	26	6	10	36	11	58	73.2	38.3	53.3	29.2
	原 級 生	53		2		4		47	11.3		4.5			
経営学部	8 0 Y 生	47	73	23	25	7	11	36	17	37	63.8	49.3	66.7	48.1
	原 級 生	26		2		4		20	23.1		8.0			
計			247	75		38		113	134		45.7		42.0	

◎昭和55年度(医学部は昭和54年度)以前の進学者数等一覧表

学 部	対象原級者数	無条件進学者数	条件付進学者数	原級者数	進学率
文学部	6	1	2	3	50.0
教育学部	19	4	9	6	68.4
法学部	12	2	3	7	41.7
経済学部	13	2	4	7	46.2
経営学部	9	1	1	7	22.2
理学部	7	0	4	3	57.1
医学部	21	14		7	66.7
工学部	44	49	15	20	54.6
農学部	13	1	2	10	23.1
合 計	144	34	40	70	51.4

(対象原級者数には休学者17人を含まない。)

参 考

◎過去1年間の原級生の進学者数等一覧表

進学年月	対象原級者数	無条件進学者数	条件付進学者数	原級者数	進学率
昭和56年4月	103	16	30	57	44.7
昭和56年10月	81	15	11	55	32.1

学生自治会との交渉経過

(1982年2月13日～8月17日)

2月23日 場 所：A棟1階応接室
出席者：学生側 自治委員長および自治委員
大学側 美崎教養部学生委員長および学生委員全員
交渉内容：新歓行事実施当日の休講措置等について、サークル棟の設備充実について、その他。

5月18日 場 所：A棟1階応接室
出席者：学生側 自治委員長および自治委員
大学側 美崎教養部学生委員長および学生委員全員
交渉内容：六月祭の日程、奨励金等について、文学部の定員制問題について、サークル棟の設備充実について、その他。

第二課程学生自治会との交渉経過

(1982年2月16日～7月31日)

3月12日 56年度備品要求書を受理。(注1)
3月13日 新入生歓迎行事に関する要求書を受理。(注2)
3月15日 56年度備品要求書、及び新入生歓迎行事に関する要求書に関する話し合い。学生側6名、大学側5名。

4月7日 新入生歓迎行事に関して追加要求書(交通ストの場合の取扱い)を受理。(注3)
4月10, 12, 13, 16, 17日一新入生歓迎行事。(12, 13, 16日の各二時限を休講)

(注1)

備品要覧	
1982年3月12日	
神戸大学教養部長 井沢義雄殿	
神戸市港区築甲1丁目	
神戸大学教養部	
第II課程自治会	
電話07818821521	
執行委員長 [黒]	
下記のとおり備品を要求します。	
記	
1. 中質紙	B4 × 10×
2. 上質紙 (ピンク)	× 3×
3. (ブルー)	× 3×
4. (白)	× 5×
5. 複写紙	100枚
6. B5用ファイル	20
7. 封筒	1 セット
8. 期	高90×幅90×厚45(mm) 3段 × 4
付記	
第8項目の期については昨年の交渉において確認されたに 拘わらず今更に取り違ひがあるので再度要求するので。	
以上	

(注3)

要求書	
1982年4月7日	
神戸大学教養部長 井沢義雄殿	
神戸大学II課程新入生歓迎実行委員会	
実行委員長 [黒]	
神戸大学教養部第II課程自治会	
執行委員長 [黒]	
4月13日に交通機関ストライキのため授業休講 にいた場合、新入生歓迎行事のため下記のことを 要求します。	
記	
休講措置について	
4月20日	2時限目
以上	

(注2)

要求書	
1982年3月13日	
神戸大学教養部長 井沢義雄殿	
神戸大学II課程新入生歓迎実行委員会	
実行委員長 [黒]	
神戸大学教養部第II課程自治会	
執行委員長 [黒]	
例年同様新入生歓迎行事を行ない新入生を迎えたい と思っております。教養部長から新入生と在校生の間の親睦を深め 相互理解を求め、団結を充ちていくというこの行事の趣旨を 理解され、協力されることを要請します。	
以上のことをふまえ下記の通り要求します。	
記	
1. 休講措置について	
4月12日	2時限目
" 14日	2 "
" 15日	2 "
" 16日	2 "
2. 予算について	
パンフレット「野薔」作製費	20,000円
映画上映費	30,000円
現物支給	
中質紙 2レめ	
上質紙 白 4レめ	
もぎう紙 100枚	
ポスターカラー 赤・黒・青 各1	
カムコープ (用) 4巻	
ハイリスル 2個	
以上	

(注3)

要求書	
1982年3月13日	
神戸大学教養部長 井沢義雄殿	
神戸大学II課程新入生歓迎実行委員会	
実行委員長 [黒]	
神戸大学教養部第II課程自治会	
執行委員長 [黒]	
例年同様新入生歓迎行事を行ない新入生を迎えたい と思っております。教養部長から新入生と在校生の間の親睦を深め 相互理解を求め、団結を充ちていくというこの行事の趣旨を 理解され、協力されることを要請します。	
以上のことをふまえ下記の通り要求します。	
記	
1. 休講措置について	
4月12日	2時限目
" 14日	2 "
" 15日	2 "
" 16日	2 "
2. 予算について	
パンフレット「野薔」作製費	20,000円
映画上映費	30,000円
現物支給	
中質紙 2レめ	
上質紙 白 4レめ	
もぎう紙 100枚	
ポスターカラー 赤・黒・青 各1	
カムコープ (用) 4巻	
ハイリスル 2個	
以上	

部落解放研究会との話し合い記録

(1981年9月～1982年7月)

- 1981年 9月16日 神戸大学部落解放研究会よりの
教養部長あて要求書を受理
(注1)。
- 9月24日 教養部長よりの回答書を手渡
す(注2)。
- 9月29日 9月16日付の要求書にもとづ
き話し合いを行なう。議題：
1. 狭山弁護団を招いての研
修会の報告書。2. 講演会に
ついて。
- 11月27日 解放研主催の講演会行な
われる。講師、米田富氏
『全国水平社の斗いと差
別糾弾の意義』
- 1982年 3月24日 教養部長あて要求書を受理
(注3)。
- 3月29日 教養部長よりの回答書を手渡
す(注4)。
- 4月2日 3月24日付の要求書にもとづ
き話し合いを行なう。議題：
1. 新入生歓迎映画会、2.
総合科目「人権」、3. その
他について。
- 4月27日、4月30日 解放研主催の
映画会開かれる。『大地の夜
明け』
- 総合科目「人権」については、別紙の総
合科目「人権」昭和56年度総括を参照
(注5)。

(注2)

回 答 書

1981年9月24日

神戸大学部落解放研究会殿

9月16日貴研究会の要求書につき、9月29日
話し合いをもつことを諒承しましたので、回答
致します。

日時 9月29日午後6時30分より

場所 A棟1階応接室

※学生自習室(旧会議室)は試験期
間で学生の使用が予想されるため。

神戸大学教養部長

井 澤 義 雄

(注3)

要 求 書

1982年3月24日

教養部長殿

神戸大学部落解放研究会

日夜 部落差別の撤廃に向けて努力されてい
ると思いますが、新入生を迎える時期にあ
たり、恒例となっております映画会等につつま
して、貴教養部との交渉を要求いたします。

すでにご存知のように、現在国会において「
同和対策事業特別措置法」の改悪法案として「
地域改善対策特別措置法(案)」がすでに衆議
院を通過し、政府自民党はその改悪法案さえも
参議院を通過させまいとしてやっきになってお
るところです。この政府の動きを先取りする形
で兵庫県では、旧来の「同和」予算を四分の一
に切りちぢめ、大学生への奨学金も貸しつけに
すると公言し、大学から部落民を排除しようと
しています。これと連動してここ数年来、全国
各地で「部落民を殺せ!」という極めて悪質な
差別事件が激発し、お隣の神戸外国語大学に
おいては昨年8月「外大部落出身者を断固排斥
し殺せ!」という許すことのできない差別落書
が発見されており、学生総体の部落出身学生に
対する差別的な見方もさることながら、そいう
体質を温存・助長してきた大学当局の責任が

(注1)

要 求 書

1981年9月16日

教養部長殿

神戸大学部落解放研究会

1. 狭山弁護団を招いての研修会の報告を提出
すること、
 2. 10月に解放研主催で行う予定の講演会の詳
細について9月29日に話し合いを持つこと
1. 2. について9月24日迄に回答して下さい。

問われているところです。

このような中であって、新入生を迎える時期にあたり、多くの部落出身学生が入学してくる我が神戸大学における部落解放に向けた責任ある取りくみが要求されております。

以上のことをふまえ、我々は、貴当局との交渉を下記の通り要求します。

記

1. 日時 4月2日(金)もしくは3日(土)
1. 内容 (1) 新入生歓迎映画会について
(2) 総合科目「人権」について
(3) その他

なお、この要求書に対する回答は、3月29日(月)までにお願いします。

(注4)

回 答 書

神戸大学部落解放研究会殿

1982年3月29日

神戸大学教養部長

井 澤 義 雄

3月24日付の貴研究会要求書につき、下記により4月2日に話し合いを行いたく、この段回答致します。

記

日時 4月2日午後6時～
場所 A棟応接室

(注5)

総合科目「人権」(昭和五十六年度)総括

昭和五十六年度の総合科目「人権」については、晝間課程・第二課程とも前期に実施されたが、それぞれその最終講義における担当者グループと全受講生との討議を踏まえ、ついで担当者代表と8人委員会との討議を経て、おおむね次のような主旨の総括と、次年度へ向けての方針策定が行われ、これが教養部長に報告された。

一、開講第三年目に当って、われわれは前年度最終講義時の、担当者グループと受講生の相互討議を通じ、主として次のような諸点を問題点

として捉え、この改善をはかりつつコースを発足させた。すなわち、コース編成上での理論的体系的側面の強化検討の問題、講義時間の不充分さの問題、受講学生数の少なさの問題等である。

二、これらのうちコース編成上での、理論的体系的側面の強化の問題については、当面担当講師の問題もあり、今年度はこうした批判を十分に考慮しながら講義内容において補うこととし、コース編成そのものの改変については今年の検討課題として次年度をめどにこれを実施する方針をとった。講義時間の問題については、とくに第二課程の場合、時間帯を変更させて改善することにした。受講者数の問題については、学生の注意を喚起し問題の重要性の周知をはかるため、講義要項にその成立の経緯と趣意を揭示し、また入学式当日教養部長がその挨拶のなかで、人権問題差別問題に対する教養部の教育施策方針に言及し、とくに総合科目「人権」への参加についても要望した。

三、今年度のコース終了時における担当者・受講者相互の共同討議では、とくにとり立てて新しい批判、強い要望は出なかったようであるが、問題は宿題として持越しの、コース編成上の理論的体系的側面の強化の問題である。8人委員会では種々検討を重ねつつ、来年度は、人権と差別の問題についての総論を冒頭におき、以下部落問題、障害者問題、民族問題の三つの各論を設けて実施することにした。この方策によって、問題の体系的理論的面の強化を実現したい。

現在の時点では、まだ最終的な講師決定にまで至っていないが、総論と部落問題とを新らしく招く講師にお願いし、障害者問題と民族問題については、これまでの講師の方がたにそれぞれ継続して担当していただくことにした。

なお、三各論中の民族問題を別立ての「朝鮮語・朝鮮事情」の方に移して合併する件、また教養部教官の中から「人権」講義者を出す件については、今後の課題として引きつづき検討して行きたい。

四、受講者数の少なさの問題については、学生の注意を喚起し問題の重要性の周知徹底をはかるため、さらにいっそうの配慮をはかりたい。入学式当日の教養部長の挨拶での言及をいちだんと強めること、また入学式当日の教養部主催講演においても、講師から「人権」への参加を

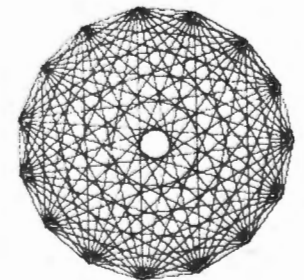
訴えてもらうなどの措置を講じたい。

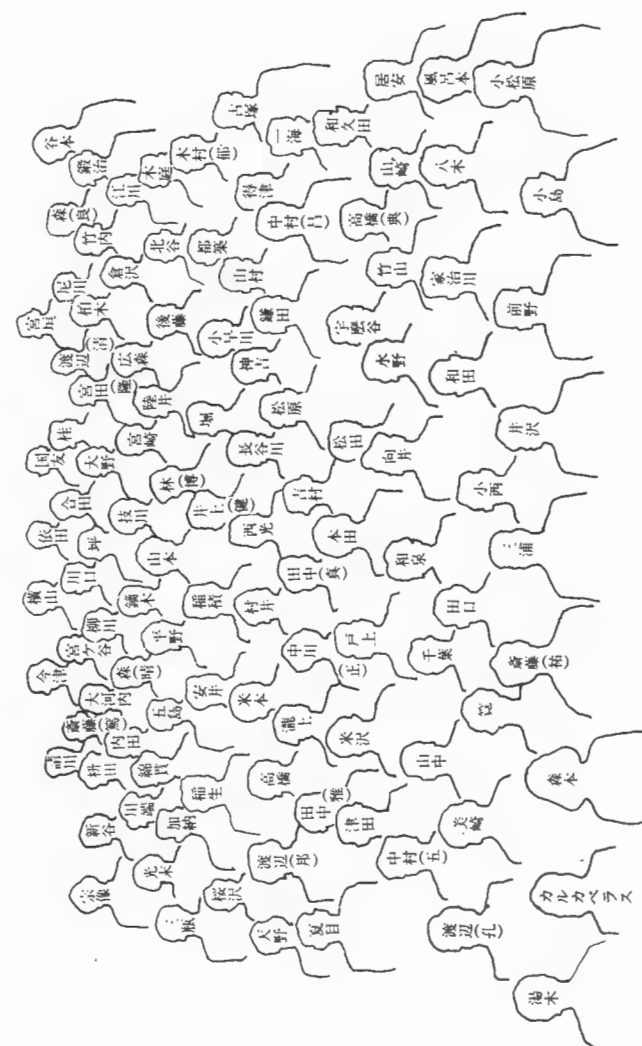
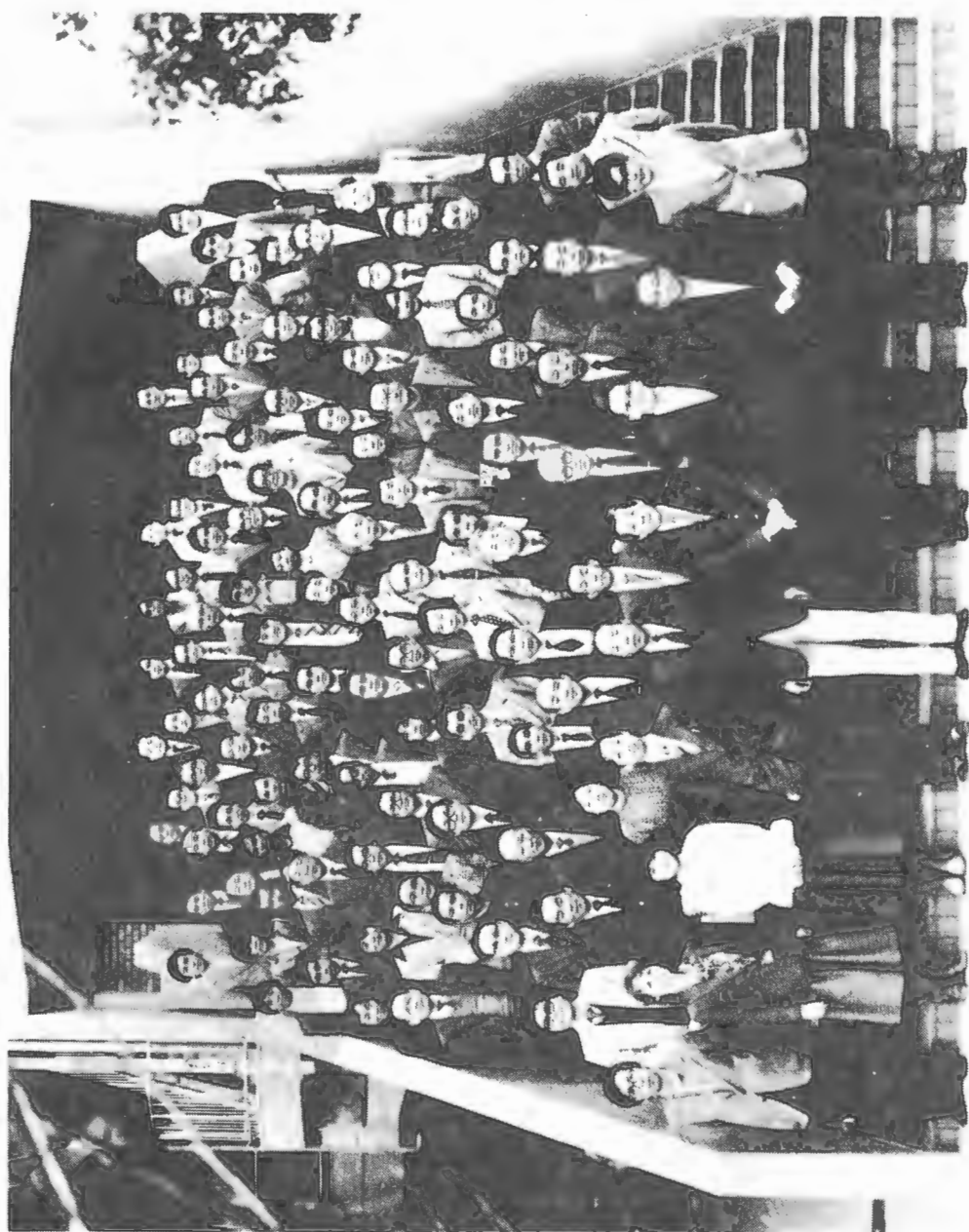
一九八一年十一月二〇日

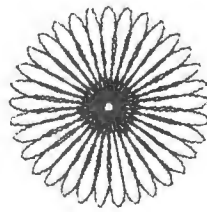
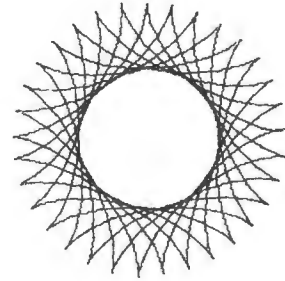
神戸大学教養部長

井 澤 義 雄

神戸大学部落解放研究会殿







編集後記

教養部はこの半年のあいだに現職の教官・職員を3名も失なうという、思ってもいなかった不幸に見舞われた。それぞれ個性豊かで人望のあついがたであっただけに、我々の心の傷もすぐには癒されがたいのである。古塚隆朗先生、木村守雄先生、岩井たいさんの御冥福を祈る。

「広報」は今号で61号を数え、人生でいえば、第二の歩みに入ったことになる。今回は教養部を退職された先生がたにも原稿を依頼した。また「私のこの1曲」は編集委員会で何となく決まった企画であったが、10篇の寄稿をいただき、大特集となったのは望外(?)の収穫であった。多忙な中、原稿を執筆していただいた各位に感謝する。

竹内章氏の転出に伴ない、この春から同じドイツ語の桜沢正勝氏に編集委員に加わっていただいた。

(KH)